

538

15

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

始



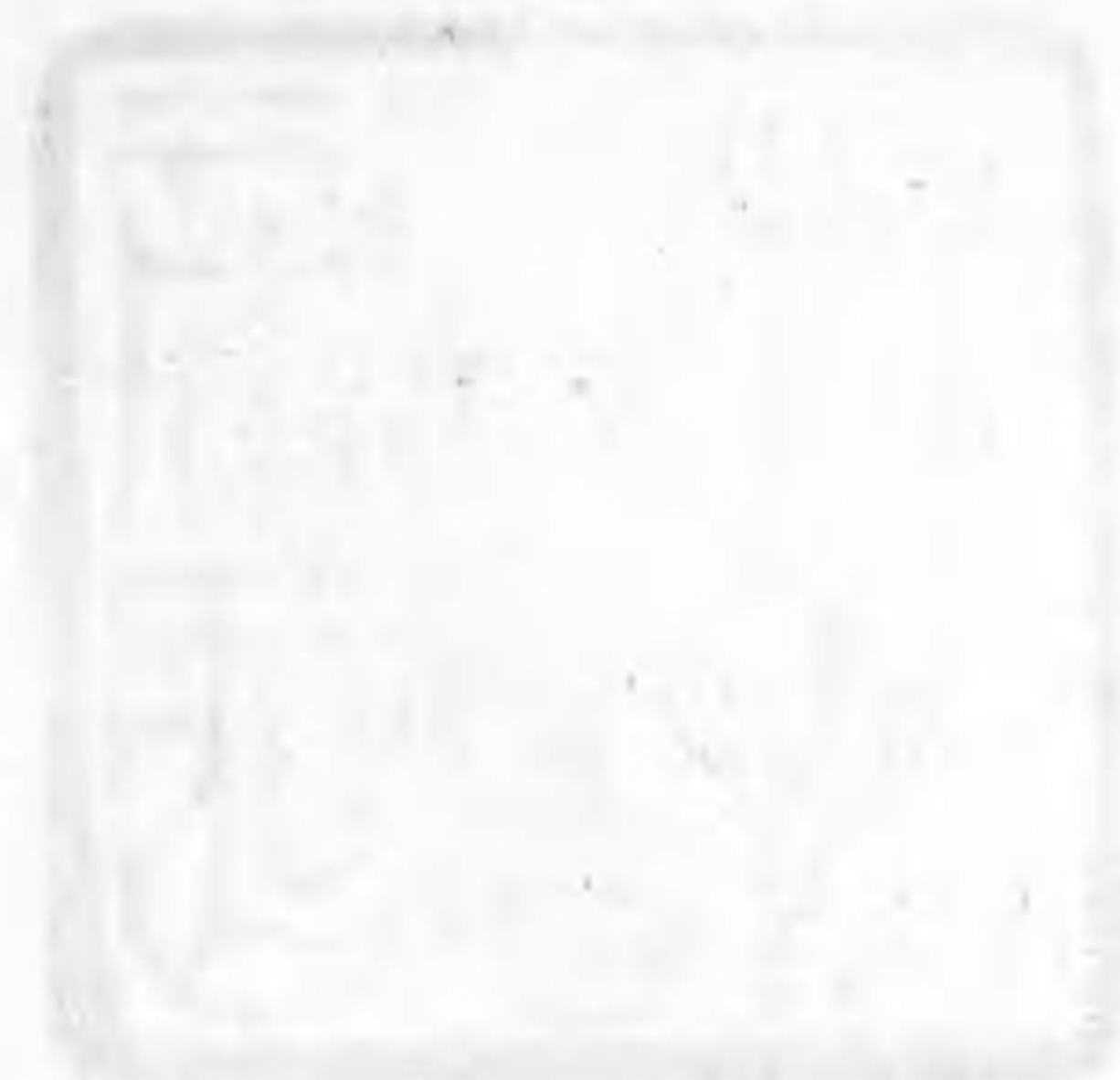


女詩人サッポオ



白正大星書院  
14. 2. 2  
内交

538-15



自序

『藝術は長く、生命は短い。』といふ言葉を、私は、しみじみと過去二千五百年を経來つて、やがて六百年にも近づかうとしてゐる、古代ギリシヤの閨秀詩人サッフオが世に問ふた、もろもろの藝術に痛感することを禁じ得ない。

二十五世紀間の歴史をもつた、世界の詩壇の全野には、實に送迎するに違ないほど幾多のイズムが標榜された。そして、それらの主義と主義とが、また派と派とが、極めて辛辣に相争闘することによつて、それら一群の製作の影を没して了つたものが、いくらあつたかを容易に擧げることにはできない。然るに、渦巻き返へすいかなる思潮の底にも葬られて了ふこ

となしに、時代と主義とを遙に超越して、この詩聖が遺した  
——作品のほとんど全部が、斷章の悲しむべき運命に遭遇し  
たが——最も華麗な、典雅な、熱情な、摯實な、豊潤な作品  
から今も尙、私達にとつて、生の泉を掬し得ることを考へる  
時に、これこそ全く私達は、オオギュウスト・コントと聲を  
共にして、『死者は、生存者を支配する。』といひなしにはゐら  
れないのである。

かやうに觀來る時には、一女性の心の扉の中に收穫された、  
斷章的創作の永遠性から、『天才は、男性的性質である。』とエ  
ライ・メチニコフが、嘗て論斷した概論的な態度に、おのづ  
から羞恥の念を感じないでどうしやう。

サッフオは、ギリシヤの女性であつた。そして、恵まれた  
大天才であつた。ギリシヤ婦人のために、また、一般巾幗者  
流のために、異性を憎伏せしむるに充分な氣を吐いた。

私は、サッフオを白熱的に禮讚するものの一人である。け  
れども、私は、私自身のこの近業に於て、心に溢れ漲るサッ  
フオ頌を全からしめたとは、決して云へない。否甚しい不満  
の念を抱くものである。讃仰に捧ぐに足るべき眞の頁は、今  
後を期せねばならないことを、私は、くれぐれも述べておく。

一千九百二十四年五月九日

麗於草房にて

法 月 歌 客

## 凡例

一、『女詩人サッフオ』一卷は、著者の極めて貧弱な資料から、たゞたゞしく綴りなされたものである。脱稿に先立つて、豫め計畫しておいたテキストを、どうしても手に入れることができなかつたために、遺憾ながらも、私は、すべてのプランから裏切られて了つた。故に、著者の志向を満すべき一貫したものを欠き、各章に亘つて、統一から離れ、精粗相半してゐることの嫌があるのは、止むを得ない。かうした原因の大きな一つも、畢竟都會生活を拒まれてゐる、私の現在の境遇だと思つてゐる。

一、上述のやうに一つのテキストを持つことなしに脱稿し

た、小著卷末の譯詩は、尾關岩二、日夏耿之介兩氏の名譯を拜借せねばならぬ立場となつた。然るにこれは、恐らく原作者をして、ごれだけか歡びを地下に感せしめることであらうし、更にまた、讀者にとつても、幸福であるかを考へることを改めて記しておきたい。それで、『レスボスの鳥乙女』一篇は日夏氏、その以外は、尾關氏の譯筆から成ることを明かにしておく。尙兩氏の外に、くさぐさの詩篇が、諸家の手によつて——例へば故上田敏氏のごとき——譯出されてゐるに就ては、敢て贅するまでもない。

一、『サッフオの肖像』(ナポリ國民博物館所藏) と、『レスボス島に於けるサッフオとその弟子の群れ』(ロオレンツォ・ア

ルマータデマ卿筆) の二葉の挿繪は、著者の親しい友人である、濱松高等工業學校教授文學士堀江耕造氏の同情の賜物なることに、厚く謝意を表する。

一、著者の書齋名『麗於草房』は、著者が濱松中學校在學中の恩師加藤雪腸先生から贈られたものである。それは稽康の詩句『峻峻亮月麗於高陽』から抽出したものである。ここに誌して、永く記録したい。

目次

I (サッフォの頌讚)	1
II (サッフォの出生)	27
III (サッフォの價値)	45
IV (サッフォの生活)	83
V (サッフォの悲劇)	99
VI (サッフォの藝術)	181

挿  
繪

I サッフオの胸像

II レスボスの島に於けるサッフオとその弟子の群

齋藤久通子氏に献ず



裝幀 齋藤佳三氏



サツフォの肖像  
(ナポリ国民博物館所蔵)



ギリシャの島島

ギリシャの島島

そこは熱烈な

サッフオが戀をして

そして歌つたところ

、、、、、、

自分自身を、『二十世紀の精靈』<sup>ソッオレ</sup>に擬した、オスカア・ワイ

ルドが、『十九世紀の豫言者』と心の底からの叫びを捧げた、  
ロオマン派の詩聖バイロンは、その優れた詩篇『ギリシャ』  
一章の中に、生涯を通じて何物の比なく咏嘆し憧憬してゐた、  
哀艶極まる、天才の閨秀詩人サッフオを禮讃した。

豊かな、あの『紫の髪』を恵まれた高貴な頭に、壯嚴なハロ  
オを冠することのいかにもふさはしく、地上に現れることの  
稀れな、余りに偉大な古代ギリシャのサッフオこそ、實際『  
デイロスが興り、フィバスの出た。』ことのそれよりも、更に  
大きな事件であり、尙また、『盃に盛つたサモスの酒』よりも、  
一層驚異に値したことは、いふまでもないことであつたらう。

“Without freedom, what thou Greece? Without Greece, what wert thee, the

Wolff<sup>2</sup> ドイツの抒情詩人ウヘル・ムミュウレルの歌つた、自由主義のために、雄雄しくもミソロンギイに殉じた、このイギリスの熱血詩人は、『自然の盲目的力以外に、人類のもつていかなるものでも、ここに發しないものはない。』といはれる、いしくも、サッフォを生ませた『靈のふるさと』に、生贅となつたことでなくして、なんであらうか。

芳烈な匂ひと、絢爛な色どりに榮え奢つて、ヘレニイス獨自な神話美の幾場面かを展べる、多島海のただ中に、眩しいやうな燦燦たる南國の陽光を浴びながら、さながら夢見心地に横はる小さい島嶼の一つ、このレスボスのロオマンティッ

クな情景には、誰もが満して余りある歡びをもつて、面せずにはゐられない。

繪巻物のやうにも、詩的なエピソオドのかづかづを、私達は、いつも忘れはしない。

いみじくも、その昔『神神の時代』に於けるレスボスの地は、樂神オルフォイスに就て遺された、興味深い一つの神秘物語がある。

そのうたふ聲の  
いともたくみに  
そのしらべ

めでたかりしかば  
この神の座りまして  
よき歌うたひ出づるに  
曠野あらのは沃野とかはり  
人なきわびしき森ぬちに  
その笛を吹きたまへば  
年ふりしこごしき榭の木も  
ゆらぎつつ踊りしとぞ

とテニスンのオルフォイス頌歌にうたはれたやうに、コング  
ライプの『蠻族の心をやわらぐる力、岩石を柔らかにし、榭

の樹を撓ぐる。』靈妙なリラの韻律で、あの犍猛無比な禽獸、  
心なき木石の群をも、感激の極度に達せしめた。けれども、  
かくのごとき音楽は、妻ユウリディエチエを失つてから、オ  
ルフォイスの手のリラによつて、もう、二度とは、聽かれべ  
くもなかつた。嘗て、鍾愛された神器は、哀傷の情に泣き咽  
ぶ、主の手から放たれて、やがて小川の流の中に落ちた。か  
くして、しめやかな音をして、海に向ふ河波は、恙なくも、  
この神の名器を、海の中に運んで行つた。青海原に漂ふこと  
の、幾日を重ねる中に、いつしか、レスボスの岸のほとりに、  
樂器は、あるがままの、おごそかな姿を、現はすに至つた。  
すると間もなく、堆く降り積む、黄ろい秋の乾反葉の中に、

リラの影は、どこしへに隠されて了つた。それからして、夜な夜な、島に生ひ茂る木の間の奥から、愛くるしい夜鶯は、ほがらかな、美しい聲をうち顫はせて鳴きしきる。それは丁度、プリマ・ドンナのジェンニイ・リンドや、ガリ・クルウチなどに向つて、聲樂上のメソオドに、靈感を與へたといふ、實に天女のやうな、清純美妙な音で、歌つて止まないのである。その歌聲の快よさこそ、落ち積つた朽葉に埋もれて、もう決して、再びは弾かれないし、また、聴くすべもない、音樂神のリラの嫋嫋たる余韻を、偲び鳴くといふことである。この怪奇な傳説の外に、レスボスの島を繞る趣味深いロオマンスが、尙一つ、私達の胸の中に生きてゐる。それは、シ

ラキユサの詩人ピندگانダロスの歌にある

静かなる

波間にありて

笛のやわらかな

音を歡ぶ

海上の

海豚のごとく

わが心

せつに動けり

のごとく、コリントの僭主<sup>タイラント</sup>ピリアンデルの宮廷詩樂人アリオンは、シシリイ島に開催された、音樂のオリムピック・ゲームに、花々しく出場した。天晴な勝利の榮光の中に、タレントムからコリントに向つて歸航する途中、甲板に於ける水夫の遭難を、海豚が救つたといふ、紀元前第七世紀にキトラ（堅琴）の演奏で、令名ギリシヤ全土を席捲した、アリオンの故郷は、まこと、このレスボスの地であつた。

かく縷指するやうに、ドラマティックであり、リリカルである、レスボスの島國が、頌榮すべく、適當な言葉に乏しさを感ずるほど、偉大なサッフオを生み、しかも、はぐくんで行つたことを見て、寧ろ、必然的環境だ、といつては當るま

いか。これこそ、神の意圖とし、神の攝理として、飽くまでも、私達の心を捉へさせたいと思ふのである。

『世界の中で、最も強い人間を集めた。』ロオマに對立して、『世界の中で、嘗て見なかつた最も聰明な人間を集めた。』と嗟嘆されるまでに優越した、ギリシヤ人は、『詩人』<sup>ポエツト</sup>なる言葉の意義を、『創造者』<sup>クリエイター</sup>とした。かくも、絶大な權威を附せられた、ギリシヤ詩人は、崇敬の焦点そのものとなつてゐた。さて、全<sup>パシ</sup>ヘレニイスが、一度口を開いて『詩人』といふ時、直にホメロスを意味したほごに、この不世出の詩聖の藝術は、限りなく畏敬されてゐた。ギリシヤの詩家を代表すべく、ホ



メロスは、絶体的に價值づけられてゐたのである。

軍神アレクシオをして、地にひれ伏させ、その豊饒な詩才に、泣かしたと傳へられる、アリストファネスの『蛙』にいふ『……ホメロスその人、かの尊むべきホメロス。』の偉大性を如實に物語るに、いろいろな、評家の言葉を、私達は知つてゐる。まづ、グロオセの讃辭を記すと、『ギリシヤ人は、デルファイの神の御聲に對すると、同じ敬虔さをもつて、ホメロスの詩を聴いた。』といふのが、それである。次に、ウオタア・ペエタアは、實に恭敬な心を寄せて、『ホメロスの詩は、ギリシヤの聖書であると考へるが、習慣である。』と論じたし、そして、『ホメロスは、ヘレニズムの最も純粹な典型である。』と

いふ欣仰の言を、シルレルの口から聴くことができる。

かくのごとくに、ギリシヤ詩宗の中に於て、エビククの作家を代表するに遺憾なきホメロスは、『地上に於て、なし得る限りのすべてのことを、なし遂げた。』と仰ぎ見られる、世界の人文史中、最も優強な民族にとつては、ほとんど、巨大な人間神の域に達した民族性の表象であつたことを、反覆するまでもないことである。ホメロスに捧げた、讃仰禮拜の程度に、後代の引例を要するならば、それは、『サウザンド・ソオル』をもつといふ、イギリスのシェクスピアを挙げたい。『インドを棄てても、シェクスピアをすてることはできない。』とか、或は『政治上のイギリスは、亡びることがあつて

も、シエクスピアのイギリスは、久遠に亡びない。』といふ、  
アングロ・サクソン民族の、この『人生の詩王』に就てのブ  
ライドを、極めて容易に思ひ出す。

『詩人』を代表したのは、ホメロスであつたが、それは、男  
性に限られたものであつた。然るに、これと反對に、ギリシ  
ヤ人が『女詩人』といふ場合には、必らず、サッフオを意味  
するにきまつてゐた。サッフオが、閨秀詩人の代表者であつ  
た事實を考へて、彼女の天分が、どれほど世に奇蹟的天啓的  
であつたかが、無條件で肯づかれる。

ホメロスの次の世代に生れた、リリックの泰斗サッフオは、

同じ時代に割據してゐた詩家カリヌス、テイルテュウス、ア  
ルキロコス、アルクマン、ミムネルムス、アルイウスなごい  
ふ、盛名ある一群の人人を、眼の前に控へてゐた。けれども、  
その一人として創作をもつて、彼女の敵手たり得る資質をも  
ち合せたものが、なかつたといふことは、斷じて、誇張の言  
ではない。若し強いて、敵手を求めるならば、『テオスの白鳥』  
の名で呼ばれ、『酒と戀と薔薇』を一生歌ひ暮した、アテネの  
欽定詩人アナクレオン一人に、指を屈するまでである。

サッフオの天分は、ギリシヤの知識階級の全野を魅惑した。  
『アポロの神の子』といはれる、大哲學者プラトオは、彼女  
の作品を一讀するに及んで、吃驚の余り遂に、自分自身の内

在性にすら、甚しい疑問の矢を、放たずにはゐられなくなつた。悲痛な告白は、何の躊躇もなしにその胸の奥から述べられた。すなはち、かうである。

『私は、サッフオやアナクレオンの詩を聴くたびに、今さらながら、私自身の作物の余りに貧弱なことが、恥かしくなつてきて、飲みさしの盃も、つい下において了ふのだ。』

精神的に全く征服され、しかも、自身の立場を危くしてまで、歸依の念に襲はれたプラトオこそ、『レスボスの詩歌の

ター』を、『第十位のミュウズ』の玉座に即かせたことは、當然な行き方であつて、哲人の心もちに、私達は、同感をもつのである。第十番目に位するミュウズ——すべて九柱あるミュウズは、藝術を始め智識方面を守護する女神である。いづれも、ギリシヤ民族の主神ヂュピターの寵愛する娘達であつて、バルナサスの山上に住んでゐる。九人の名は、クライオ（歴史を司る）、ユウターパイ（音楽、抒情詩）、サライア（喜劇、牧歌）、メルボメニ（悲劇）、タアブシコリイ（舞踊、唱歌）、エラト（戀歌、輓歌）、ポリヒムニア（讚歌、抒情詩、修辭學）、ユウラニア（天文）、カリオパイ（雄辯、叙事詩）である。——に列せられることの、地上に活ける者として、あらゆる尊敬

とか、信奉とかいふ中の、最高級に属するものであることは、敢て言を俟ない。サッフォの謳歌者は、プラトオの外に幾人もある。一一これを挙げる煩に堪えないが、アリストテレスは、ホメロス及びアルキロコス等男の詩人とおなじ位置に、彼女を評價した。『七賢人』の隨一の稱あるソロンは、一面理性的で峻嚴な立法者でありながら、好んでサッフォの藝術に親しみ、且つ深い理解をもつた。そして、愛誦する製作の印象を語つた言葉は、實に力強く有名である。

『サッフォの詩を記憶して了ふまでは、私は、決して死にはしない。』

名詩『ラヴェンナ』の中に、作者オスカア・ワイルドが、バイロンを推讃して、次の一節のやうに、サッフォの名を引照してゐる。

バイロンよ君が王冠はつねに鮮らしく緑である。

サッフォの生れたるミタイレネからの色紅い薔薇の葉は額を飾り

、、、、、、

詩人のある一人は、独特なギリシヤ思想に基いて、サッ

オに對する感激の情を現はすに、『第八十次の遊星』といふ異名で、彼女を呼んだ。そこで、私達は、"O Hesperus! thou bringest all things."の一句を思ひ出さずにはゐられない。

桂冠詩人なる『テオオスの聖人』アナクレオンは、その全生涯を『少女よ、汝の戀に我狂せり。』と歌ひつづけた、快樂主義者であつたけれど、戀に苦しみ悩むことが、こんなに烈しいならば、自分は、サッフオのやうな、失戀の死態を、擇びたいといふのが常であつた。かの悽愴な、リュウカディアの突兀なる懸崖と、森森たる海洋は、どんなに、このエビキユリアンの心に喰ひ入つたことか知れない。

『リュウカディアの絶壁から、私は、白波のひるがへる、大洋のただ中に身を投じて、波にまかせて浮びたい。戀は、私を酔はせもするし、それと同時に、狂はせもするからである。』

薔薇色の手や足の幻覺を、明に眼の前に展げ見たといふ、耽美主義者であり享樂派詩人であるアナクレオンは、寂しきうな顔をして、かう歌つたものだ。

『初期キリスト教藝術』と批評されてゐる、『ラッファエル前派』の詩人ダンテ・ガブリエル・ロセッチは、その一流の感傷的な詩情をもつて、『サッフオの對詩』として、『麗人』一

篇を書いてゐる。ギリシヤ詩人であるシドンのアンティペエ  
タアには、『サッフォを頌ふ』の名詩がある。

サッフォよ、汝エオリヤの地よ

かのミュウズ死ねり

死ぬるなきミュウズと手を提へ

ならば立ちてうたひしを

サッフォ、かつてはキプリスと愛との

愛兒まなごにてありしを

サッフォ、ミュウズの髪に

枯れざる花輪を編みぬ

サッフォはヘラスのよろこびにてその冠なり

恐ろしき運命の女神等

人のために紡ぎて三人の支ふる

糸をばくり下しぬ

なご汝は彼女のつきせぬ日のため

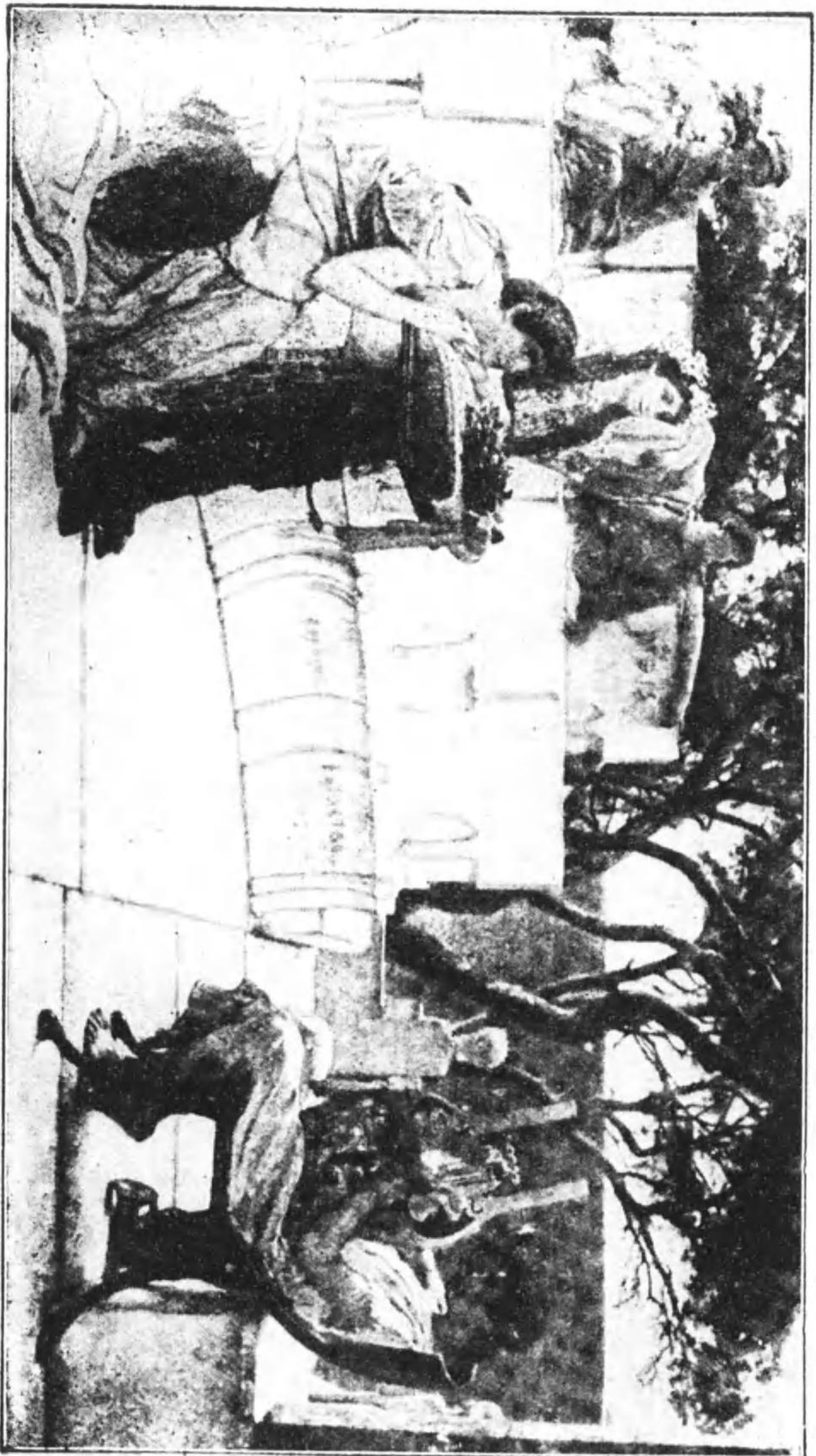
没いらざる日のために紡がざりし

彼女はエリコンの不朽の歌を記せしものを

共和詩人と呼ばれる、スウァンバアンは、自作『アナクト  
オリア』の詩に、サッフォを通じて、作家自身の悲嘆の情を、  
歌はうと企てた。即ち、それは、『……サッフォの像の中に、

私の魂を投じやうとした。』といふ告白の通りである。また、『ヘロイド』一篇の詩に、戀愛詩人オオヴィッドは、サッフオに送つた、ファオンの一文を書いた。これは、オオヴィッド自身の、戀の嘆きを、手記したのに外ならない。かの有名なフェミニストであるジョン・ステュワルド・ミルの口から、『ギリシャ人は、サッフオを大詩人と考へた。』と彼自身が、讚美するかのやうに述べられたのは、極めて當然なことであるし、サッフオその人を、大哲アリストテレスに比肩せしめた、勇敢な女權論者オリイブ・シュライネル女史が、次のやうに叫んだ心持に、私達は同意せざるを得ない。

『……一人のア斯巴シア、尙遡つては、一人のサッフオが、男性と伍して、限られた女性の環境を突破し、壯大なる天才の力をもつて、新らしい活動の形式及び勢力ある智的の活動に勝利を得ながら、突進した。……』



レヌボス島に於けるサツフオと、その女弟子の群  
(ロホレンツホルマヤーダブヤ卿筆)



II

大能の御手から、殊寵的に、世にも異常な詩歌の才氣を賦與された、サッフオの、この人界の光に觸れた第一日が、果して、いつであつたかは、非常に漠然としてゐて、眞に、信憑すべき有力な文献がないのは、實に遺憾の極みである。含蓄に富む、多くの歴史家は、めいめいに、いろいろと研究の歩を進めた。

紀元前六百二十五年といふのが、その一説である。他に異説としては、紀元前六百十年乃至五百八十年といはれてゐる

のがある。然し、兩者のいづれもが、疑問の範圍を出ることができない。誕生日に明瞭を欠いてゐると同時に、その故郷に關しても、史家の考證は、矢張一致点を見出さない。評傳記者の一人は、サッフオが『ミティレネの女』の別名を付けられたほど、その偉大な名を賣り、従つて、市民權を得て、一生の大半をミティレネに過した、といふ事實を、いい参考材料として、ここを、彼女の生地だと主張してゐる。これに反し、他の一人は、レスボスのエレサスを指摘してゐる。その理由としては、つまり、彼女がエレサスに呱呱の聲をあげるご間もなく、幼女サッフオは、両親のあたたかい腕に抱かれて、この島の首府ミティレネに移住した、と論斷してゐる

のであるが、史實の不完全なために、それが、ごうしても、臆測たるの嫌ひがあるといはなくてはならない。私達は、數多くの遲疑から截ち切つて、前者の唱へるミティレネ説に左傾しやう。なせかなら、エレサスには、この時代に彼女とおなじサッフオといふ名で知られた、一娼婦が、時の伊達者の心を、烈しく捉へてゐた、といふ實證からである。上古の史料が、彼此混同しやすいことは、免れ難いと思ふ。

名前の發音は、ごうか。ギリシヤ語で讀むと『サッフオ』といふのが、正確である。ところか、レスボスの島民の訛りから行くと、『ブサッフオ』であるし、親しみを寄せて呼ぶ

愛稱には、『ブサッフオ』が、一般に使ひ慣された。

貴族の家系から出た、サッフオの父は、スイダスの記述に據ると、スカンドロニムといふ名をもち、母をクライイズといつた。いたいけなサッフオが、六才といふ幼年時代に、慈愛の心に厚い両親は、それぞれ、相前後して他界の人となつて了つた。彼女は、やつと物心がついた頃には、もう、悲しいみなし兒の生活に入らねばならなかつた。かうした、荒寥たる環境のうちに、幼年期を送り、少女期を迎へ、妙齡の時代が、彼女に經めぐつてきたのである。遺孤の彼女には、二人の兄弟があつたが、これこそ、彼女にとりて、せめても

の慰めといふより外はなかつた。その一人のラリカスは、青年時代をミティレネに設けられてある、『フリクニウム欺待公館』の大廣間で、上流門閥出の美しい若人達のために催される、日毎夜毎の饗宴の席を巧みに縫つて、酒杯の献酬を斡旋する務を、自身の仕事としてゐた。もう一人の兄弟カラキユウは、エヂプトのノオクラティスへの旅をば、はるばると、豊潤な、くさぐさの酒を行商して歩く商賈であつた。この驛路海港の往來を重ねる中、異國の手ぶりのつれづれさに、妖艶な娼婦でギリシヤを始め、ヨオロッパ全土に有名な、このノオクラティスの街で、旅途の疲れを休めた一夜のこと、ふとして、ロドピスといふ異名で呼び慣されてゐた、女奴隷で、しかも、娼

になつた。娼婦美から富を成したといふ街の美妓との、ゆくりなき、この初対面は、二人の異性者をして、生命を賭すること、敢て辞せないほど熾烈な愛慾の煽の中に、身を投げ入れさせた。そこで、カラキユウは、愛するドリカを、憐れむべき奴隷の羈絆から、そして、賣笑の境遇から自由の地位におくべく、今まで貯蓄しておいた、莫大な金を支拂ふことを、少しも惜しいとはしなかつた。この顛末は、サッフオの巧緻な作詩の中に、描き出されたが、洗練したシニカルな筆によつて、或る諷刺を含ませてゐる。麗人ドリカとのこの情痴史は、サッフオの製作ばかりに、見へるのでなくして、史家ヘロドタスも、おなじやうに認めて、著作の中に書き加へ

てゐる。

花も恥らう妙齡の時代を迎へたサッフオは、型のごとく結婚問題が起つてきた。さて、婚姻の式が、世の常のやうに擧げられ、アンドロスの市民で、富裕な、ケルキュラスの家庭に入つた。波瀾のない伉儷の間には、間もなく一人の娘が設けられ、その掌中の玉には、幼少の時死別した、母とおなじ『クライイズ』といふ名をつけたといはれてゐる。このことは、ケルキュラス夫人サッフオ自身の作の『サッフオの娘』が、明らかにしてゐる。

われ兒を持てり

愛しき兒をば

美しさは

黄金の陽ひにも比すべく

または早咲の

美しき花のごとし

クライイズ、そは

わが娘の名なり

リジャの寶物

わがものなりとも

よろこびて捨てなん

いかにも、フレックシブルな情趣を織りなす、文字から見ると、吾兒がもつ明眸皓齒を誇り、従つて、その美容にチャームされた、母親の熱情のどれほど深かつたか、といふ度がわかる。尙、『吾兒に』では、母性愛を根づよく見せてゐる。

汝を抱かしめよ

可愛ゆきわが兒よ

サッフオの娘に就ては、冷たい眼で、見てゐる記者がある。『クライイズ』といふ小供の名は、その實、彼女の友人の名

だ、と打消してゐるのがそれだ。

レスボスの地は、その時代の常態に洩れないで、絶えず政争の渦中に巻き込まれてゐた。階級争闘——貴族對平民の軋轢は、極点に沸騰し、たうとう、ごうすることもできないほど猛烈に、炸裂して了つた。で、貴族の流をくむサッフオは、閩族追放の中に加はり、シシリイ島に流竄するの止むなきに至つた。刑地で、多くの辛酸を嘗めた後、紀元前五百九十年になると、その親しい友人のピッタカス王が、配流中の貴族一味を、本國を歸還させた。この中に、サッフオが混つてゐたことは、いふまでもないことである。ふたたび、楽しい家

郷の土を踏んで、彼女が、聞くも涙の種である、悲劇的な一生を閉じたのは、紀元前五百六十五年頃であつた。

レスボスのイオニア人は、エオリア人、ドリア人とは趣を異にして、美を愛する念が強く、早くから『詩は、愛らしい兄のごとく、音楽は、愛らしい妹。』といふ言葉通りに、詩歌と音楽との、水ももらさないほど親しい関係にある、姉妹藝術が、驚くべき優位を占めてゐた。これに加へるに、受け入れた異郷からの藝術的刺戟は、驚くべき効果をもたらした。ピエリカの古詩、リディアの楽器による影響は、美の感覺をして容易に智的概念に轉じさせ、更に一步を進めて洗練した

情緒の境地をつくるに與つて、いかに多く役立つたかは、いふまでもない。

歴史によると、ギリシヤ殖民時代に續いて現はれたのは、僭主時代であつた。紀元前第七世紀の後半及び第六世紀、即ち、紀元前六百五十年から五百年に亘り、僭主は、寡頭統治である貴族政治時代から、民主政治の時に遷らうとする、過度期に生じたものである。詳しくいふと、一般に貴族の失政に乗じて、その中の野心家が、みづから民衆のために闘ふのであると宣言し、庶民の援助を得て怨府である、寡頭政治を顛覆したのである。この絶なかつた、アリストクラッシー對デモクラッシーの血と火の亂闘から、人心の動搖は甚しかつ

た。ために、感傷的な抒情文學をして、ますます多産ならしめることになつたのは、疑ふまでもない。然るに、タイラントは、いづれも、その都市の有力者級のものであつたから、自ら藝術のパトロンともなつて、詩や音樂を豪奢な宮廷に迎へ、これらをして、伸びるだけ發展させた。殊に建築に至つては、都市の美觀を添へるために、極力注意を拂つたのである。

かくして、藝苑が、燦然と光被された、紀元前第七世紀乃至第六世紀には、僭主の宮廷に仕へた詩聖アナクレオンが出た。ケオスのシモニデスがゐた。更らにギリシヤ最大の抒情詩人と稱せられた、ピンドロスが生れたことを、忘れてはな

らない。ギリシヤ哲學の萌芽も第六世紀に發した。又、ソロン等の『七賢人』——タアレス（ミレタス）、ピアス（プリエネ）、キロン（スバルタ）、ピッタカス（ミティレネ）、ペリアンドロス（コリント）、クレオビュラス（リンデス）の輩出したのも、この時代に屬してゐた。

ギリシヤ文化の先驅者となつたレスボスは、紀元前六百年の前半に、エオリアの藝文の『黄金時代』<sup>イオルドゥン・エエチ</sup>を形造つた。サッフォが、この藝苑のクライマックスに生を享けたことは、幸ひであつた。正しく彼女こそ、詩壇の大成に、待ち設けられてゐたと見るが妥當であらう。イオニア、エオリア、ドリア



を通じて、この女性を除いては、婦人として、詩歌に托して思想感情を完全に発表するものがないといふ、天の恩寵を受けたサッフオは、當時、詩才を競つたアルカエウスだの、ステシコラスだの、或はまた、ピタカスだのといふ、一方の闘將と轡を並べて、つぎつぎに、創作を世に問ふた。然るに、『女性なるが故に……』といふハンディキャップを、作品を鑑賞し、評價するに、何等必要としなかつたほど傑れてゐた。テオクリトスの牧歌のごときは、いかに多く、彼女の製作の反響があるかを見るのである。

詩壇の第一人者！詩神が、遙かなる天から贈る至高至上の王冠は、サッフオの頭を美しく装ひつくした。誠に、彼女

の藝術は、“Doing”のものでなくして、全然、“Being”のものに属するもの、といはなくてはならない。

III

女性としてのサッフオ、人としてのサッフオの比倫を絶した、大きな内生を説く前提として、當時の婦人界の概観を述べることによつて、その輪廓を、ヨリ明らかにすることができさる。

内生活といふことが、古代ギリシャの婦人社會に、果してあつたかを疑ふほど、彼女達の心の活き方は、意表外に出た稀薄さであつた。自ら『自由の國民』を高唱してゐた、ギリ

シャ人にして、家庭奴隷の不文律をもつた矛盾は、實際怪訝に堪えられない、咄咄たる怪事である。既婚婦人は、いかなる階級と、いかなる場合に於ても、奴隷に等しい『物をいふ道具』で、家庭の奥深いところの『女部屋』の一室に蟄居させられた。この特別な住居を外にして、『自由な婦人は、通り街に出る戸口で、限られなければならぬ。』と喜劇作家メナンドロスのいつたやうに、一步たりとも、故なくして、戸外に出ることを許されなかつた。あだかも、幽閉された小さい一廓の中で、料理、裁縫、手藝といつた家事家政だけに専心するのが、日常生活の全部であつた。異性との交際は、公共の場所へ行くことは、思ひもよらぬものであつた。そして、劇

場へ行くことさへも許されなかつた。甚しきは、妻を奴隸に賣る特權をも、男はもつてゐたのである。ホメロスの『オデッセイ』の中には、このハウス・キイバアとしての女性が、如實に現はされた。

『さあ、家に戻つて、家事を執りなさい。糸引車と織機とへおつきなさい。そして、召使達にあてがはれた仕事を、精出してするやうに、いひつけなさい。人と話すのは、男の特權です。』

妻は、良人と寢所を共にしたのであるが、食卓は、いつし

よでなかつた。良人の名を呼ぶ代りに、『主人』の言葉を用ひ、『天成の奴隸』として、全く、良人の下婢の資格であつた。かうした結婚關係から、寡婦は、血統上最も近い男性の支配を受けて、自由に再婚することができなかつた。イタカの王オデュッセウスの妻ペネロオプの物語を、私達は、直に回想する。従軍した王オデュッセウスは、征地を轉轉し、軍旅を共にした各將士が、全部凱旋したにも拘らず、獨り歸國を肯じないで、二十年間に及んだ。美貌の譽をもつて一世に高く、且つ、貞操の堅い妻ペネロオプに魅惑されてゐた國人は、空聞を守る彼女の愛を買はんとして、王の戦死の虚報を放つた。そして、一齊に彼女の身邊に迫つて、再婚を強要した。然し、

群る愛の欣求者に向つて、決して、その耳を借せやうとする  
ペネロオプではなかつた。堅き守操に、すべての哀願泣訴を  
峻拒して、敬愛する良人の歸宅を待つた。愛慾に狂へる彼等  
を無難に操縦する一計を案じた彼女は、たとへ王が、戦歿し  
たとしても、その亡靈を弔ふために、哀悼の證あかしとして、衣を  
織りたい。死の衣が織り成された時こそ、愛を與へる一人の  
争者を迎へやう、といひ放ち、織機を宮廷に仕立てて、梭を  
手にし始めた。けれども、ペネロオプの織機は、織ざらんが  
ために織るのであつた。故に、晝は織り、夜の訪づれるのを  
待つて、織られた糸を解いた。織手に動かされる糸が、布に  
かはつて了ふ時は、いつであるかわからなかつた。幾歲月は

水の流れるやうに過ぎて行つた。賢明なペネロオプの術策に  
かかつて、待つべく待つにあぐんだ求婚者は、テレマッカス  
に對して、その代表者アントニウスを差し向けた。強硬な交  
渉を受けた時、アントニウスは、彼等の要求を述べて、次の  
やうにいつた言葉から、結婚の自由が、一般ギリシヤ婦人か  
ら、取除かれてゐたことを、時代思想乃至命令的習俗として、  
明らかに識別することができる。

求婚者達はおん身に告げる

おん身は心のうちではそれを知つてゐる筈だ、

すべてのアケアン人は實際をきかなければならない。

おん身の母をここへ呼び出せ、彼女を、彼女とその父  
この選ぶ良人に嫁がしめよ、と。

有夫姦は、ソロンの立法によると、慘虐にも、妻なる婦人の生命を失はしめることによつて、辛じて、その罪が償はれるのであつた。『魂と生命とをもつ、あらゆるすべての生物の中で、私達女性ほど、悲惨なものはない。』とは、メディアナらずとも、誰れしも放たすにはゐられない嘆聲である。有婦姦を承認して、有夫姦を極刑に處断する、片務的な性道徳は、ギリシヤ國民にとつて、人道に徹しない、見逃すべからざる大きな過失だ、といはなければならぬ。

ハウス・キイバアたる婦人が、萬一にも身を戶外に運ぶ時は、嚴守すべき習慣として、必らず面貌にヴェールをかけるのであつた。普通の外出には、『グリップテロス』といふ、日本の『おこそ頭布』式のものを用ひ、遠出する際には、『ベタンス』と名のついたものをかぶり、決して、素顔を他人に見せなかつた。この囚れた守舊退嬰の婦人道徳の改廢されない限り、世界の地平を破つて、獨特な聰明と慧智に誇る民度をもつものの、ベタア・ハアフたり得ることは、想像にも及ばぬところである。

一代の文化を飾るに足るべき、ギリシヤの諸家の婦人觀を羅列する時、こんなにも指彈を受けつつあつた、魯鈍暗愚な、

愍然たる女性の面影が、私達の眼前に遺憾なく髣髴する。しかも婦人解放論なり、家庭制改造説なりが、いつ擡頭するものかと怪しまれる位である。

たとへ、両性の天賦の能力を、同等であるとプラトオが、主張したにしても、かの『國家篇』の中で『子供、婦人、奴隸。』と總括して、三者を同じ位列においたこと、そして、女性の手で、何一つとして、産業上に能力を發揮してゐないことを、論難したし、自分自身をアポロの子と信じて、活き甲斐ある四つのことを、神に感謝するとした中の第二に、女にでなく男に生れきた点を高調したことの、論者の心境に想倒

することは、容易である。プラトオが、ソドミストであつたことを忘れてはならない。アリストテレスの論議も、矢張り男性は、女性の支配階級たるべし、といふ主張の基礎の上に立つた。妻は、良人の意嚮に迎合しなければならぬ。僅に、よい忠言を良人に呈するだけの余裕を與へただけに止めて、彼自身は、同性愛を重視した。女權とは、妻が良人に『忠告する權利』であつたのである。アリストファネスは、その喜劇『リシストラタ』で、女性を『半人間』と貶し去り、『テスモフォリア』の作中にも、辛辣な見方をしてゐる。また、メナンドロスは

『女は、ごうでも悪魔だ。ただ、その中でいちばん優しい姿をしてゐる奴を捉へる男は、仕合せ者だ。』

といつてゐるし、反婦人主義者のユッリビデスは、『懇願者』サッブリアンツ中のエイストラにいはせてゐる。

『何事でも、殿方に代つてしてもらうのが、伶俐な女なんでせうよ。』

シュディディイスは、『よくもわるくもいはれぬ女性こそ、最も褒むべき資格がある。』と説いてゐる。ある一人の作者は、

『ブラクサゴラ』といふ創作の一節に、屈辱的な女性を、警句的に揶揄してゐる。

『彼女達は、皆おなじやうに、昔やつてきた通りのしきたりで、熱い湯に着物を浸けるんです。少しでもその仕方を變へることはしませむ。彼女達は、昔のままに座つて、料理の手を動かします。彼女達は、昔のやうに、頭で物を運びます。彼女達は、普通にテスモフォリア(デミイタの祭祀)を催します。彼女達は、普通に良人を働かせます。彼女達は、普通に糖果を買つてきます。』



もう一人の作者が論じてゐるのも、同一筆法である。

『戦争、政治、演説は、男子の領分である。家事を司ること、家庭で留守をすること、それから、良人に従つて好く世話をするのが、女の領分だ。』

夫婦関係を牧畜に比較したのは、テオグニスである。アルクメオンは、スバルタ女を『コンプリメント附屬物』とした。ギリシヤにあつて、婦人のシムボルが『龜』であつた以上、かくのごとき酷評を甘受せねばならないのは、當然である。

女性に對する、この驚くべき侮蔑は、ギリシヤの『黄金時代』と呼ばれた、ペリクレスの末期までつづいた。

ギリシヤの男性が、異性から求めて與へられない、心の悶え悩みの程度は、蓋し思ひ半に過ぎるものであつた。一般のギリシヤ婦人に對する、幻滅と絶望とに苦んだ彼等は、何ものかに、その空虚を満し、飢渴を醫すことに焦慮した。かくして、それこそ實に變態性であり、且つ倒錯的である性的對象者をば彼等は、見出すに至つた。謂ふところの二つの道――その一つは『ウウルニング』(ウウルリックの命名)である同性愛、他の一つは、『愛のためにヘテレを有す』とインテリ

ゲンツィアの間の通語となつてゐた、一種の高等娼婦型の特種婦人を相手として、醸し出される、戀愛の陶醉境であつた。恐怖すべき、不自然極まる男性同志の間に起つた同性愛は、時代病の一つとして、猛烈に漫延した。いかにも墮落すべき悪魔臭味を帯びた、この習癖は、有史以前のギリシヤの國土に遡つて、行はれたことを知るのである。即ち、イリアスに於ける、若い美少年ゲニメデスの劫奪物語は、その一例であつて、同時にこのロオマンヌから、當時の戀愛が、奪略にあつたことをはつきりと知ることができる。ホメロスの盛時、その詩歌時代にいい題材を提供した、同性愛の物語乃至挿話の中には、アチリス對バトロクスの注意すべきものがある。

詩聖は、兩者の關係を極めてエクセントリックに描寫した。ミムネルモスやアルカイドスのおのおのの同性愛も、同様に詩歌の中に飽く迄も美化されて、永遠の生命を得た。要するに、アナクレオン前期の抒情詩には、異性との戀愛を歌つた作品はなくして、その全部が、同性愛の頌詠であつた、といひ得られる。ソフォクレス、ユウリピデス、及びテオクリトス等ギリシヤ禱詞選一群の作家の創作は、謂ふところの同性愛を、聲高に提唱したもの、といはなければならぬ。男性間に流行した、同性愛に就て、その實例に觸れてみた

い。  
美少年ハミイテスを熱愛した、ソクラテエスの心は、狂ひ

に狂つた。ハミイテスの外には、好んでアルキピアデスを對象に選んで、燃ゆる情緒を訴へた。天資善良なアルキピアデスは、大聖の一つの言葉にも、靈魂を攪き亂して、感動の余り、流れる涙を止めることができなかつた。けれども、両者の性的交渉が、プラトオの高唱するプラトニック・ラブであつたことは、もちろんである。換言すれば、性的關係を遙に超越して、したすら、純な愛の絶体境地の善と美とに即するのであつた。プラトニック・ラブの意義に就ては、いふまでもなく、プラトオの名著『對話錄』ダイヤログ三十余卷の中に含まれてゐる、『フェエドラ』及び『饗宴』シンポジオン——ソクラテエスの弟子である美少年アガトオンが、自作の初期の悲劇一篇が、懸賞に

當選したのを祝ふため、その家に集つたフェエドラス、アリストファネス、ソクラテエス、アガトオン、エリュキシマッホス、アルキピアデス、パウサニアスの七名の一團の中で、アリストファネスが、テエブル・スピイチとして、試みた話であるが、その中で、最後に意見を述べたソクラテエスの言説が、『シンポジオン』全篇の要説であり、且つ、プラトオ自身自身の議論といふことになるもので、後世になつて詩人シェレエが嘆賞したもの——が、巧妙な話術をもつて、神秘的な説明に努めてゐる通りである。アテネの街には、高い課税の下に許された、娼家ポルデルがあつた。年若い多くの美少年が、そこに賣られてきてゐた。それら娼家の一つで、ソクラテエスは、

初めてフェエドラスと邂逅した。不遇な少年は、イリスに生れたが、戦亂の際に敵軍に捕はれて、奴隸市場に突き出された。遂にプロステイテュウシヨンの恥づべき賤業を、娼家で強ゐられたのだ。ソクラテエスの親しき友の一人は、大金を出して、少年を魔窟のどん底から救ひ出し、ソクラテエスの仲間に入れた。師弟の交情は、余りに深まつて行つた。ソクラテエスは、自身に死を覺悟した前夜、『おん身は、その師のために、間もなくこの髪を、悲しみの印として、斬らねばならなくなるであらう。』といひながら、少年の長い髪を梳つた。アテネの大政治家ソロンは、ブルタアクによると、矢張り、同性愛に惑亂してゐた。

『ソロンは、美しい處女に執着を感じもせず、且つまた、拳闘家が、戀愛のために、闘ふごとき力をもたなかつたことは、奴隸を禁止した意味に於てではなかつた。少年を愛するといふことを、當然讚美すべき性癖であるとしてゐる。』

とブルタアクは、書いてゐる。尙、マキシム・チリウスは、次のやうに美しく述べた。

『ソロンは、すべての美少年を愛した。彼の詩歌は、

シユメルデスの縮れ毛を讚美し、クレオブ羅斯の眼を、  
パチ羅斯の青春美をほめたたへた。』

ソクラテエスを始めとして、當代の有識階級が、怪奇な同性愛に耽溺して、何等顧ることのなかつた主因は、全く結婚悲劇の堪え難い試練と、低劣幼稚な婦人社會への一大叛逆でなくして、果して何であらう。

ギリシヤの男性が、異性間の戀愛で、眞に陶醉境をつくり得る唯一の對象者を、娼婦の『ヘテレ』の群の中に求めたといふことは、既に前述の通りである。父系の承認乃至尊重に

隨伴して起つたものは、娼婦制度で、男性は、その相續者の血統の純正を期するために、妻をして、他の男性との關係を絶体に禁じた。同時に、彼等自身は、他の女性との自由交際の門を開いた。母權制の終焉に勃興したのが、賣淫制であつて、アテネに新法律を制定したソロンは、公許の娼樓『ディクテリオン』の創設を急いだ。『ディクテリオン』は、ギリシヤ、ロオマの神殿、或は中世紀キリスト教會のやうな神聖感を抱かせて、官憲の直接保護の下においた。この種の女性は、プラトオ時代にコリントだけでも千人余を下らなかつた。男娼と散在してゐた、女娼の『ヘテレ』といふ語義は、『良い友達』を意味し、『アテネ黄金時代の名花』とさへ歌はれたもの

である。『ヘテレ』は、他の娼婦の部類『アウレトリデス』、『デイクテリアデス』、『コンキユバインス』に比較して、優秀の点に於て、全く同日の談でないことはいふまでもなく、優に、ギリシヤ文化の中心人物の墨を摩してゐた。『娼婦であつた』とエレン・ケイのいふ『數多のギリシヤ婦人は、哲學者たちの門人であつた。その中の或る者は、哲人達のインスピレーションでさへもあつた。』ほごに、實に深奥な教養、異常な天分、喚發した才氣に加へて、天成の美貌、魅力ある表情等、等、等……をもつて、而も、殊に許された、音樂の才幹と會話の巧妙とは、そのサロンに、一代の大思想家なり、大藝術家なりの諸名家を惹きつけた。『女性ギリシヤの盛觀』をつく

つた、彼女達の私宅は、あだかも、フランスのロココ時代から始まつて、十九世紀末に盛りを極めた、『サロン生活』の起源とも見らるべきものの状を呈した。大雄辯家デモステネスが、『ヘテレ』のネエラに與へた演説中には、『ヘテレ』の何物たるかを、よく物語つてゐる。

『私達を歡ばすために、『ヘテレ』があり、私達の雜用のために、『コンキユバインス』(家庭に使役せられる女奴隸)があり、私達の嗣子を生むのと、家政を司るために『妻』がある。』

『ヘテレ』に對して、非常に深い感激的興味をもつたデモステネスが、『何人も、その妻の外に、二人の情人を必要とするのではないか。』といったことがあるが、『二人の情人』とは、もちろん、『ヘテレ』を指してのことである。

光彩陸離たる時代の大立物のすべてを、自身の周圍に集めてゐた、『ヘテレ』の中でも、特に、天賦の才分と麗容とを、一身に兼ね備へてゐたアスパシアは、小アジアのミレトスに生れ、幼時アテネに住んだものであるが、彼女は、この地に娼家を構へて、多くの美女を集めながら、種種な薰陶に余念がなかつた。妓樓の中に於て、數多くの娼婦と嫖客とを、前にし、修辭學と哲學との講義に、豊富な蘊蓄を傾けた。フィ

デアス、ソフォクレス、ソクラテエス、アルキビアデス、プラトオ等は、彼女にとつて、實に手答のある論客であつたのに、驚かざるを得ない。ピュチオの女豫言者から『ソクラテエスに優る賢人はない。』とまでいはれたソクラテエスも、世界の惡妻愚婦の典型と見做される、詩人ハイネの言葉を藉りて、『ソクラテエスは、賢明ではあつたが、彼は一文すらも草し得なかつた。これは、全くクサンティッペの罪』である、クサンティッペとの結婚悲劇から、もう二度とは、普通の女性を訪問するのを肯じなかつた。然るに、アスパシアを見出すと共に、『おお、わが師よ!』と呼びかけるまでの敬意を表した。そして、常に彼女のサロンを叩き、親しげに、互に堅

く持してゐる信念を披瀝し合つた。彼は、時に『修辭學者』  
とも彼女を尊稱した。ペリクレスは、雄辯法を彼女から授け  
られた。彼の演題中には、アスパシアの作がいくらかも含まれ  
てゐた。饒多な智識をもつた彼女は、いろいろな方面に才分  
を發揮した。世界の衣裳發達史の中で、最も傑出してゐると  
いはれてゐる、アテネの衣服は、アスパシアの創意に據つた  
ものである。あの世界に特異な無數の襞、暗い紫色から明る  
い黄色に至るまでの各種の彩色明暗、美しい限りのギリシヤ  
模様……そして、歴史に通饒してゐたことも、彼女の大を語  
るものといへる。オリイブ・シュライネル女史の稱揚するア  
スパシヤに、デヨン・ステュアアト・ミルが、『アスパシヤに、

は、一つの哲學的述作があるといふわけではないが、ソクラ  
テエスが、彼女から教を受けた事實は、何人も知つてゐるこ  
とで、また、ソクラテエス自身にも、これを認めてゐるとこ  
ろである。』といふアスパシヤに、私達は、キッシユの言葉を  
思ひ出す。

『アスパシアの官能的魅力、ルクレチアの忠實、コ  
ルネリアの才能——』

時の大政治家ペリクレスは、アスパシアと相識るに及んで、  
互の心のこまやかさは、更らに深きを加へて行つた。ペリク



レスは、今日までの不幸な結婚生活を悔ひてゐたが、アスバシアの愛を感じるに至つて、斷然無理解な妻を離婚して了つた。理解ある人格結婚を経た、ペリクレス新夫人の人格は、飽くまでも高潔で、崇拜の的となつた。

アスバシアにつづいて、ソクラテウスと智的な交渉をもつた、『ヘテレ』のテオドロタの名は、忘れべき筈のものではない。プラトオは、ラスゼニアを敬愛した。デモステネスは、レエスに蕪惑された。ペルシャ王クセルクセスは、ギリシヤ遠征の際に敵地に於て、サルジェリアの愛に落ちた。王自身の真情を表明するためには、テッサリア政府との外交談判の席に、その委員たるべく、愛人サルジェリアを推すことであ

つた。

社交界の花形たり、ギリシヤ女性の代表者であつた『ヘテレ』は、アリストファネスのもろもろの喜劇を観る資格があつたし、また、フィデアスやアペレスのアトリエに、自由に出入することをさへ許された。これは、『家庭的奴隸』たる主婦の夢想すらし得れない事實であつた。すべての公の生活は、『ヘテレ』が中心となり、王者もいさぎよくその脚下に跪いたのである。かくて、彼女等の彫像は、公衆環視の裡に委せられた。その一例に、デルファイのフリネの立像が、二人の國王の間に挟まれて建つたのを見ればわかる。フリネは、アレキサンドル大帝の慘虐な戦禍を蒙つて、全滅したテエベ市

を、獨力で復興を企てた、勇俠な女丈夫であつた。プラクシテレスは、クニドスの島民のために、ヴィナスの女神像を彫む時、美術家自身の戀人であるフリネをモデルに使つた。これは、モデル製作の始源となつたのであるが、その畢生の傑作『クニドスのヴィナス』は、裸体像であつて、クニドス島の貨幣のレリイフにその縮圖を、また、ヴァチカンに於てその實物の寫しに、原作を偲ぶのである。

この他、エビキュラスの愛人ダナエ、プラトオに配すべきアアカナサ、それから、コリントのライス、グナタナエなどが異性との交際範圍は、それら當時の大立物の正妻の名を、史上から奪ひ去つて了つたのである。ピンダロス、シモニデ

ス等の才筆は、いかにこの『ヘテレ』を謳歌するに躍つたか。かくして、これら女性の生命は、藝術の中に不朽化されたのである。

日月と光芒を争ふに足るともいふべき、偉大なサッフォが、當時『ヘテレ』以外のギリシヤ婦人の中に、ただ僅に一人、嶄然一頭地を抜いて、仰ぎ見られることができたといふことに於て、時に、彼女が、『ヘテレ』の群の一人に誤認されやすい理由とせねばならない。

サッフォは、よく『ヘテレ』として見られた。

特殊階級の『ヘテレ』が、ギリシャ婦人を代表的總稱的に、虹のごとき氣燄を吐いてゐた一汎は、上來述べた通りである。然るに、レスボスの貴婦人のみは、ギリシャ本土とは、ややその有様を異にして、高等教育を受ける特典に浴してゐた。それがため、婦人の個性は形づくられるし、智識の方面に、情操の方面に、伸びれるだけ伸びて行つた。日に夜に開かれる社交の集りの中心にも、藝術に關するクラブの堂堂たる論客の中にも、彼女達は、なくてはならぬ關係に、置かれたのである。

われはわが記憶の

わが死後にも

あらんと思ふ

、、、、、、

と『われ』の中に、自身の不朽の價値を凝視したサッフオが、特權階級出といふ社會的位置に加へるに、豊麗極りなき詩才をもつてしては、レスボスの婦人社會と藝術界とに、さながら、巨人のやうな花らしい歩武をもつて進んだことが、容易に考へられる。サッフオは、詩社を結んだ。その令聞に魅された、多くの同志と弟子は、光輝ある傘下に馳せ集つた。音楽、文藝、舞踊、禮儀、作法、美容術を彼女は、その朱唇を

縦ばせて教授した。尙また、詩壇の『エオリア風』は、彼女の文藝上の貢献の大きなもの一つである。作家としてのサッフォは、一面に数多くの門弟を藝苑に送り出した、懇切なペタゴオグでもあつた。即ち、友人アルカエウス（エオリア最大の詩人、閨秀作家の指導者、政治家、軍人、哲人）と協力して、『エオリア學院』を創立し、彼女自身にこれを主宰した。

『その全身が、メロディであつた。』といはれた、女性の詩聖サッフォは、ギリシヤ全土の、音楽の耆宿と仰がれてゐた。樂理樂典の深奥に通饒したことは、眞に、大音楽家であつた。

かの『リディア旋法』の完成は、全く、彼身のオリディナリテイの賜物である。元來、抒情詩は、特にリラに合せて歌ふもので、原名はギリシヤ語の“Lyra”から派出した、“Lyricus” (Lyric) である。ロンサアルの言葉を藉りて、『音楽は、詩の妹』であり、ロセッチの『詩は、音楽に移植された、靈魂』である。抒情詩と音楽とが、どうしても離すことのできない關係にあつたやうに、その樂器の發明も、またサッフォの手を要した。六絃のリラ——『バルビトン』(Barbiton) は、その創意から形をなした。みづからリラを手にして、歌ひながら靜に立つた時の、彼女の威嚴ある麗容は、全く、女神そのものになりきつてゐたといはれてゐる。

### III

サップオとアルカエウスの詩は、シングル・ヴォイスの歌  
曲に作曲されてゐるが、合唱曲には作曲されてゐない。

詩人といふ詩人にして、熱愛の情をサッフォに注がないものは、その時代にほんごなかつた。その中、アルカエウスの胸に湧き立つた、纏綿たる情緒は、名状しがたいものであつた。そこで、彼は、『蜜のやうな聲で、愛らしく歌ふ女』サッフォに、いみじくも美しい詩を作つて、愛を捉へんとした。けれども、その訴へ求めた愛は、何故か、つひに酬ひられずにしまつた。

それは、『アルカエウスの戀』一篇に、歌はれてゐる。

アルカエウス

われはいふべかりし  
われは告ぐべかりし  
あはれ恥づかしさと  
おそろしさは  
わが言葉をふさぎぬ

サッフォ

少しの美だにありせば  
少しの美だにありせば

君が舌はつとめて  
いひもしつらむ  
君が眼なざしは  
恥づかしさを冒し  
またはおそれ  
君が思ひのわが耳に  
入りきたるを  
防がざりしならむを

多情多感なサッフオには、かぞへて余るほど多くの相聞の詩がある。沈痛な戀愛の哀樂の姿が、まざまざと、烙印の跡

のやうに色あざやかに、讀者の胸に映づる。例へば、斷章『君が眼の美しさ』には

親しく  
わが前に立ちて  
君が眼の美しさを  
開き見せたまへ

この明眸の持ち主は、女か、それとも男か、いづれにしても、つぶらかに見開く、美しい瞳に恍惚として眺め耽ける、嘆美主義者サッフオの俤を偲ぶのである。しかもまた、『若き

『男の友へ』の一篇を見ると

わが友よ、とごまりて  
若き新嫁を求めたまへや  
われは老ひすぎて  
君が妻にはふさはしからず

この四聯の句に至つては、いかにも、悲しく寂しい戀のサ  
ッフォの影が、浮動してゐることを、しみじみと感じさせる。  
ペタゴオクとしての彼女は、自身の女弟子に對する衷情を、  
いろいろな作品に歌つてゐる。代表的の女弟子エリンナとか、

アチスとかを、……名作『アチス』には、かう歌ひかけてゐる。

われ一度  
すぎし日に  
君を愛でしことあり  
アチスよ  
君はいと小さき乙女と見へ  
またはなはだ美しかりき  
アチスよ  
君は今わがことを



思ふを憎みて  
アンドロメエダに  
逃げ行きぬ

かくのごとくに、同性を作品のテーマにしたといふことが、しかも、熱情的に吟詠したことが、いつしか、美しい『レスボスの鶯』なるサップフォをして、同性愛に耽溺したと誤らせる原因となつた。『サフィズム』、或は『レスボスの戀』——そんな言葉が、遂に同性愛にかへられて了つた。第三性化した婦人間には、よく性欲倒錯の同性愛が濫用される。『サフィズム』と名付けられたものは、元來フェニキアに起源を有つた

ものだ。その後ギリシャへ、それからシシリーへ、そして、イタリアに入つて行つた。同性愛が帝政時代のロオマの婦人を風靡した時に、マルチャルは、詩を作つてこれを諷刺した。同性愛で史上に名を知られた女人は、ドイツのハインリッヒ第八世妃カタリナ・ホオワルド、ロシア女帝カタリナ第二世、二十七才の身をもつて刑事問題を惹き起し、死刑に處せられたドイツのマルガレエテ・リンケン、フランスの女流小説家、社會主義者ヂョルヂュ・サン、おなじくマダム・ド・スタエル、イギリスの閨秀作家ヂョオチ・エリオットなどである。ヂョオチ・エリオットとナイティンゲエルとの親交に就ても、ナイティンゲエルからモオル夫人へ宛てた手紙の中に、『戀愛

ぬきの同性間の親交……』といふ一句があるが、いかにも中性的な婦人の世界に、同性愛が繚漫することの甚しかつた例證である。かやうに見來つて、同性愛の始祖にサッフオの名を付けたのは、サッフオの聰明と慧智とを、ヨリ有効ならしめることにもなつたと、見ることに妥當であらう。

サッフオの容貌は、ごんなふうであつたか。

マキシモステュリオスのいふところに従ふと、それは、『小さくて黒い』顔であつた。愛を得るに専念したアルカエウスによれば、『黒い髪、清らかにやさしくほほゑむ』である、にこやかな顔の持主である。要するに、オリエンタルな風采で

あらう。コケットとかエロティックとかいふべき官能美は少なかつたらう。靈性美を語る高潔典雅な容貌は、精巧につくられた粘土の浮彫に、花瓶の繪畫に、『おお、上品なサッフオ様！あなた様を、私達のものといひきすることは、なんたる仕合せなことでありませう。』と尊敬した、レスボス人の貨幣の表面の彫像に出てゐる。それは、まさしく

『お琴をもつた神様と、弓をもつた神様とを繪にした。……』

と形容された、その壯重な外貌と心持ちとをもつてゐたとす

るのが、當つてはゐまいか。

サッフオのロオマンティックな短い生涯は、藝術家の製作にいい主想を與へてゐる。けれども、そのいつれもが、半神話的人物のやうに描寫されてゐることは止むを得ない。殊に、『サッフオ』と題する六つの喜劇、『ファオン』と呼ばれる、二つの喜劇はそれであつて、ギリシヤ有名なコメディストのアリストファネスが、『雲』の中で巧妙にカリカチュア化した、ソクラテエスと全然同じ行き方である。ゲエテ、バイロンの詩聖が燃えるやうな讃辭を呈したフランツ・グリルバルツェルの悲劇『サッフオ』は、失戀のサッフオの最後を脚色した

ものだ。それから、アイリアノスの評傳、メナンドロスの記述なども、サッフオの一生の核心に觸れるには、まだ可なり遠いほごに、彼女は、傳說的圈内を出てゐない。

音樂に現はれたサッフオは、幾多の名曲によつて、知られてゐる。ヨハンネス・ブラームスの力作『サッフオの歌』は、ハンス・シュミットが、『サッフオ詩体』を模倣して作った詩に作曲したものである。グランヴィル・バントックも、『サッフオの歌』を歌曲にしてゐる。オペラでは、三つの大作があつて、皆『サッフオ』の題名をもつてゐる。その一つは、一千八百四十年デオヴァンニイ・バチニが、デオヴァンニイ・カンマラノの書いた、イタリイ語の臺詞に作曲したもので、

幕数は三つ。初演は、脱稿した年の十一月二十七日ナポリで行はれて、非常な成功を博した。その後一千八百四十三年四月一日イギリスのドゥルリイ・レエンで、英譯にして舞臺にかけられた。エミイル・オオギエルの臺本に施した、シャルル・グウノオの三幕物の作曲は、その二であつて初舞臺は、一千八百五十一年四月十六日のオペラ座である。五十八年七月九日の演出の際には、二幕に短縮された。五十一年八月九日には、コヴェント・ガアドゥンでイタリイ語で開演した。この時から、幕数を四つ重ねることにし、八十四年四月二日グラン・オペラの上演で、すつかり作の價値を、最上位に定めることができた。グウノオにとつて『サッフオ』一曲が、

大作であつたことは事實である。これは『グルックが、創始した、デクラメエションの形式を復活するために、社會がグウノオに期待してゐた。』とアドルフ・アドオンが、賞讃したほごに、劇的な音樂として出色な作品である。即ち、新形式をオペラに建設したことを、明かに認めることができる。その三は、ジュウル・マスネの作品で、ヘンリイ・ケエンとアサア・ベルネの共作に成つたりブレットを用ひた、五幕といふ、コミック・オペラの大物である。初演は、パリのコミック座に於ける、九十七年十一月二十七日のことであつた。この外に、フランスの作曲家マルタン、即ちマルティイニにも、『サッフオ』といふ作品があり、ルイ・ラコンブにもカン

V

タアタ『サッフオ』一曲があることを、附け加へておく。

サッフオといふ名のほとんど全部に、連想を起すに足るべき、世にもいたましい、悲しき戀のエピソオドは、哀愁そのものの最も大きい一つとして、若い人人の心を捉へ、且つ、果しなき追憶の涙をそそる。

混沌たるギリシヤの太初に、神エロスは、下界と光明とを生んだ。エロスを首座におくチタンの神族は、奇怪なヂャイアント——人類以上の巨大な体軀と、臂力とを併せもつ——

であつて、その怪力を揮ひながら、手當り次第に四方を征服してゐた。これを見たツォイスの神は、精神美を欠如して、徒に、暴力本位に振舞ふチタン族を憚らず思つた。天上の諸神の神は、大神の召しに應じて馳せ参じ、怪力神の一族を掃蕩した。そして、新に二十四ヶ國が割せられるに至つて、ツォイスは、その神殿をオリムポスの山上においた。かくて、ギリシヤは、初めてツォイスの神の四年によつて、治平の世を見たのである。

古代ギリシヤ人は、『神人』と『人神』とへの使徒であつた。ペロポネサス半島、マケドニアとテッサリアに境をなす

エリスの地、九千七百五十フヒイトのオリムポスの山上には、  
全民族を法悦に導く最高の男女十二神——ツォイス、ポセイ  
ドン、アポロ、アレス、ヘエファイストス、ヘルメス、ヘエ  
レエ、アテネ、アルテミス、アフロディテ、ヘスチア、デエ  
メテエル——がゐると信せられてゐる、神聖無比なこの靈山  
には、フィデアスの馨の香に、さながら活けるがごとき、象  
牙と黄金の巨像が、嚴然として、優強無比な國民に何事をか  
を命令し、もしくは、話しかけてゐる。

詩人スタシノスは、歌つた。

『これっ、森羅万象の創造主なる、ツォイスに關し

ては、おん身達は、語ること勿れ。なんとなれば、恐  
怖の存するところであり、また、尊崇の存するところ  
であるからである。』

紀元前五世紀に當つて、この『聖丘』に建立された、ツォ  
イス神殿の祭典は、ギリシャの『四祭』といはれるピュチオ  
ス祭、地峽祭、ネメア祭に加へられたものの一つで、その四  
つの中最も大きいものであつた。しかして、ホメロス及びヘ  
シオドスの時代、即ち、紀元前七百七十六年に、大く貴い神  
奠の一つとして、第一回の大祭が舉行された。熱狂的な祝祭  
は、全<sup>パシ</sup>ヘレニイスの國民的感情を喚起し、いやが上にも、搖

盪させたのであつた。挽歌の調べ悲しい、葬禮の際にも、競技を忘れないといふやうな、尙武的國民性が、渾然と大成するに與つて力のあつた、オリムピヤ・ゲエムは、その後、時代の推移に委せて、一時中絶の状態に成り化した。

エリスの國王イフィトスは、事多き國內を憂ひて、ギリシヤ國民の一擧手一投足を支配してゐた、ツォイスの豫言のためにつくられてゐる、バルナサス山下の『デルファイの神託』を、巫女に仰いだ。リディア、フリギア、ロオマの遠きに及んで、このいやちこき神裁を傳へてゐた、巫女ドオドオは、身に月桂樹を纏ひ、三脚の椅子に座して、乞はるるがままに嚴に答へた。即ち、オリムピヤの祭儀を再興しなければなら

ない。この祭典を怠つたから、主神ツォイスとヘラクレスの怒を買つて、今日のごとく、國內に擾亂を來したのである。故に、祭典再興のため、直に各邦に命じて休戦せしめよ、といふのであつた。ペロポネサスの各國に向つて、神託は、飛電のごとく傳へられた。けれども、何故か、國國の人民は、神託の眞意にさからひ、各國聯合の下に再び神託を希つた。『祖先の文化を再興するために、エリス人の指揮命令に従はなくてはならぬ』との神命には、最早や、一点の疑問を挿む余地を見出なかつた。イフィトスは、主力を盡して、ギリシヤ全國民を打つて一丸とし、ツォイスとヘラクレスの名譽のために、四年毎の七月に大祭儀の盛觀を復活させることにな



つた。

エリス國のピサ附近に、神さびた深い森がある。森の奥には、ツォイスを祀つてあるが、周圍は、見渡す限りの廣い平原であつて、神話時代にヘラクレスが、ツォイスのために武技の競争を催したといふ傳説がある。この口碑に基いて、一帶の地は、『オリムピヤ』の名稱が附せられ、祭禮の場所に選定されたのである。エリス國及びその各市は、オリムピヤ守護の重任を帯びた關係から、永久安全地帯に協定されて、都市は、悉く防備用の城壁を撤して了つた。

オリムピックの大祭に催される、オリムピック・ゲームは、その始め『競走』の一種であつた。その後四種を加へて、所謂『ペンタチロン』(五技)といふ名稱で、呼ばれるやうになつた。『飛越』、『槍投げ』、『競走』、『相撲』、『皿盤投』の五種がそれである。坦坦たる平地に砂を撒いたフィールドは、壁を築いて左右に分たれ、その一方を馬車の競走に、他方を自余の競技に充てた。ギリシャ青年をして、熱狂の渦中に投せしめた、この大競技に参加すべき若者は、均齊された壯麗な体格を要した。明澄純美な情操を所有するを要した。それが、純粹なギリシャの血統を享けたものでなければ、選手たるべき資格のないものとされてゐた。そして、嘗てただ一回の犯罪があつ

たものとしても、それこそ絶体にこの選に洩れることであつた。婦人の参加は、もちろん許されなかつた。すべては、神聖化され、宗教觀を帯びて運ばれて行つた。『五技』の外には、『拳闘』、『四頭馬車競走』等のプログラムもあつたが、参加する選手は、ギリシヤ以外の民族に規定されてゐた。

四年毎に行はれる、オリムピヤ國民祭は、宛然森嚴な宗教的祭儀の色彩があつた。バルテノンの殿堂の長押の間にある、大理石の浮彫の群像から、私達は、この光景を知ることができ、るやうに、祈禱、犠牲、合唱、讚歌がその一大背景をつくつてゐたのである。しかし、この祭典から割據散在してゐた全<sup>パ</sup>ヘレニイスは、渾然と融和し統合されるに至つた。當日

は、諸國諸市から使節が遣された。怒濤のごとき、暴風雨のごとき五日間に亘る、大競技の日程が布告されると、開會に先立つ少くとも一ヶ月間は、國民は、どんなに紛糾錯雜を重ねきた抗爭や戦争も、截然と中止しなければならなかつた。その上、全國民が集つたのを好機として、互市場を開き、或は賣買取引に、親族の問題を解決したり、政治上の條約を締結したりした。中には、祭禮を利用して、和睦を結び、紀念に双方からの費用を合して尖柱塔を建て、これに和約の銘を刻したことも尠くはなかつた。かくのごとくに、眞に文字通りの舉國一致の心情をもつて、ここに始めて異つた三民族――アイオニア、エオリア、ドリアを同族的に、そして民衆的

に結びつなく唯一の楔子となつたのだ。正しくそれは "of the people, for the people, by the people." の思想なり觀念なりが、完全に實現される機會を與へたのである。

『<sup>デモソッド</sup>半神の民族を通じて、この民族は、その血統を不死の神にまで辿つた。』といはれる民族に、ギリシヤ悲劇の出生を見たごとく、彼等は、一種のドン・キホオテ式オブティミストの半面をもつと共に、他面にハムレット式ベシミストでもあつた。半裸体でゐられるやうな、天の惠深い氣候に呼吸し、美しい限りの肉体をもち、そして、アナクレオンが、二十絃のマガデイスを奏しながら、戀と酒を歌ひ踊つたやうなヘド

ニズムを奉じてゐた民族ではあつたが、哲學的に、人生觀上に堪え難い憂鬱と、懊惱を抱いてゐた。『さあ、バッカスの歡ばしい泉を、用意してくれ。なせかなら、それは、苦痛の解毒劑だから。』とか、『太陽の見渡す限りのすべての人類は、何人も幸福でない。』とか、『どうして、私は生れたか、どこから何のために、ここに來たのであるか。』とか、『地上で、這ひ且つ息をする萬物のうちで、人間より憐れむべき者はない。』とか、『私は、泣きながら生きてきた。飽くまでも泣いて死ぬ。』  
——私は、萬斛の涙を一生に見出した。……といふごとき内省思索が、いふならば、プロメトイスの劫刑のやうに、また、ミネルファの毒蛇に捲き緊められた、ラオコオンのやうにも、

常に彼等の頭を悩ましてゐたのである。その舉證に、トラキヤのある民族が、嬰兒の誕生を哭し、また、死人を苦惱から救ふためにと、お祭り騒ぎをして、埋葬する習慣のあつたのもつてしたい。そこで、彼等は、デルファイの殿堂内に掲げられた、奇怪な神秘的な畏怖すべき神の箴言である、扁額の『汝自身を知れ！』と血をもつて書れた、文字を仰いで、それが正しく、至上命令であり、ギリシヤ國民性の鉄則と自信した。彼等は、自己静觀のメスを揮つて、倫安してはゐられなかつた。"to be"なる肯定觀と、"not to be"なる否定觀とは、思想生活の圏内に、嵐のやうな争闘を絶たなかつたのである。ニイチエのいふ、ディオニソス主義とアポロ主義——神人合

一なり、靈肉合致なりの理想上の最難事が、豫想外に順調にオリムピック・ゲームを機縁として企てられ、且つ、爲し遂げられたともいひ得られる。換言すれば、美術界の驚異として見られる、ギリシヤ彫刻に現れた、男性的肉体美を誇り顔に、裸体で行はれた体育競技だけでは、ごうしても、この最高種族が、意識する生の要求を満すことは、不可能であつた。ここに於てか、『美しい肉体に宿つた、美しい靈魂』のあこがれに専念した。さて、この『美はしく、善き』ために、我等は、メンタル・ライフの徹底的産物を賭けることによつて、眞に、生活意義に味到することができた。故に、ひたぶるに欲し求めた、人文的オリムピック・ゲームが、何等遲疑する

ところなく、必然な事として、ツォイスの殿堂に於て、決行されることとなつたのである。物心合一、神人同化のこの生活意慾に於てこそ、プラトオのいふ通りに、『ギリシヤ人に老人はない。心に於ては、皆若い。』のである。

人文上の競技に提出された主題なり發想は、一つとして、時代思潮の本流となり、輿論を喚起するものでないものはなかつた。詩人、哲人、音楽家、歴史家、雄辯家の徒は、争つて、参加するを絶大の光榮とした。これには、唱歌、豎琴、笛、ビルリック・ダンス（戦場に於ける攻撃を象徴したもの）婦人の神秘的な祭儀の唱歌と、青年の合唱が行はれたが、特

記すべきことは、『ペロポネサス戦史』の名著で、學究の深遠を現はした、『歴史の父』ヘロドタスが、諸國遍歴の後、紀元前四百八十年のオリムピヤの祭典に、數萬の公衆を前にし、自著會心の章を高聲に朗讀して、時人を驚かせたことである。熱心な聴衆中の一人の青年シュウシディットは、これに發奮して、決然修史の業に臍を固め、やがて、有數な史家としての令名を、世に傳へるに至つた。また、ゴルジャス、リシァスなぞいふ雄辯家は、ツォイス神殿の屋上に攀ち登り、壯烈な大演説をして、民衆を熱狂昂奮させた。その他、哲學者プラトオ、政治家テミストクレス等の久遠に不滅な名聞は、皆オリムピヤを搖籃としたものといはなくて、果して何であら

う。

五日間の競技が終つて、世の榮譽を荷つた、オリムピヤのレコオド・ホルダアは、名譽のトロファイとして、この國民独自の思想から案出されたところの、神苑に生ひ立つ、あらたかな、神木橄欖でつくられた、緑の冠を授けられるのが、掟となつてゐた。それは、神官が、恭しく圓光を放つ頭上にかぶらせるのであつて、授賞者の名が呼び立てられると、群衆から湧き上る狂歡の呼びが、これ決して湧き上るのであつた。嘗て、デエロス島のチャゴラスは、二人の子供が、同時に優者の榮冠を得た悦びに、氣が昂つて、絆切れたことがあ

つた。この際この時、群衆の呼びは、異口同音であつた。

『死ねよ、チャゴラス！おん身のために、この上の望みは、決してないぞ。』

至高至善な、この表彰に加へて、若者達の肖像は、大神の彫像をいつき祀る、神苑内に奉献する特權をさへもつて遇せられた。ために、天晴勇士の立像は、社殿を繞つて林立し、衆人羨望の的となつたが、更らに同じ肖像は、その國國の中央にも建立される二重の名譽をもつてした。それ故、若き勝利者には、頌榮の歌ひ込まれた唱歌、友人知己の長い行列、

それに引續いて、夕の祝宴が營まれるのが常であつた。或る處では、終身公費を以つて、優者を扶持した實例さへあつた。これら王者にも等しい壯士の頌榮に、詩人ビンダロス以下の詩家は、いづれも競つて、得意な詞藻を用ひて歌ひ歌つた。殊にビンダロスは、自身の芳醇な詩想の大部分を、國民的大祭祀の乾坤一擲式競技の壯觀に、勝利に、そして王冠を得るよりも貴い光榮に傾注した。その頌歌集『エビニキオン』四十四篇の短唱の中、十四篇が、オリムピヤ祭の勝利者を讚美（ビュウチオス祭の競技に十二篇を、ネメヤ祭の競技に七篇を、地峽祭の競技に十一篇を）してゐる通りである。夕の祝宴の光景に就て、ビンダロスは、次のやうに歌つて

ゐる。

『面美はしき月の、愛らしい光の輝き出でて、全構内が、酒宴の歡喜の歌で、鳴り渡つた。』

『夕には、カスターリの傍に彼の名が燃え出た。三グレエスの歡喜の起つた時……』

全ヘレニイスにとり、かくのごとく大事件視せられた、オリムピック・ゲームは、この國の年代を計算する起点となり、その第一回を紀元前七百七十六年として、これを『第一オリムピアアド』とした。そして、ゲームは、紀元三百九十四年

ロオマ皇帝テオドシユウスが、禁止令を下すまで、前後千二百年間に及んで、行はれたのである。

詩の女神の寵兒として授けられた、世にも稀れな天分を、惜げもなくサッフオは、オリムピック・ゲームに注いだ。そして、豫ねて期した通りに、月桂冠を獲得したといふ飛報が、レスボスの島にとどいた時、島の人人は、まるで『天へも届ほご』に、輝かしく大い『私達のサッフオ』の名を讃仰した。わけても、彼女がほんごに幼かつた時分に、初めて豎琴の手ほごきをした、忠實な老人のラムネスを始め、サッフオが、自身の娘分に取り扱つてゐた、女奴隷のメリッタや、その他サ

ッフオ家の人人は、もう、氣が狂つて、なにもかもちぐはぐになるばかりに、思はず歡びの聲を上げ合つた。それにつづいて、ひたすら、慈み深い主人の飯へりくるのを、待つばかりであつた。

迎へる者は、氣をあせりにあせつた。

地上の榮光と喜悅とのすべてを象徴する、ゲームの王冠を、おほやうに頭上に戴き、身には眞紅のガウンをきらびやかに纏ひ、手には黄金造りのリラを持つて、白馬が牽き進む、華美な馬車に乗つた、オリムピヤの勝利者は、女神のやうに氣高く見へた。

歓迎に群がり集つた、島民の心を撼つて、この上もなく不



思議がらせたのは、彼女が側近くに、見知らぬ一人の若い美男を伴つてゐることであつた。若者の顔は、青春の血に燃え、幸福に酔ひ、ヘラクレスの裸体美さながらの輪廓からなつてゐることが、何人の眼をも羨ませた。

ファオンといふのが、美丈夫の名で、ミティレネのマドロスの一人であつた。

ファオンは、ごく幼少の頃から詩歌に心を奪はれてゐた。よちよちと、危い足どりで歩きながらも、リラの絃に手を觸れて、春ふく風にも鳴りやすい樂器の美妙的な韻律に、すべてを忘れて聴き入るのであつた。それ故、姉テアノが、銀鈴を

あざむく聲で、アンドロメダの歌やアッチカの小唄を、ごりごりめもなく口ずさむ時には、歡喜に堪えぬやうに、彼は、小さい身を顫せるのが常であつた。幾春秋のめぐりくると共に、ファオンの注意深い耳は、サッフオの名を聴きもらす筈がなかつた。『ミティレネの女』の名によつて知られる女流詩人を、敏感な少年は、世にまたなきものとして、憧憬し始めた。あの美しい詩の作り主は、どんなに美しいのだらう。神様に近いほごにかうがうしからう。想像に描き出される麗容は、眼の前にあるやうな氣がした。

詩の王冠を争ふ、詩歌の戦ひの日は、愈愈到來した。遠き旅路を厭ひもせず、オリムピヤの祭典に真先にやつてきた

のは、件のファオンであつた。サッフオの顔を見る！たうとう、青年の燃える多年の希望は、今日の晴れの舞台にこそ達せられるのだ。

アルカエウスは歌つた。アナクレオンも歌つた。……けれども、けれども、懸命な歌合戦に何の甲斐もなかつた。選ばれた唯一者は、この國第一位の詩聖文豪を蹴落した、サッフオであつた。たつた今、サッフオの創作に心酔した、ファオンの心は、その平静を失つてゐた。あらゆる献身の意、敬恭の念を表せんとして、夢遊病者のやうに、山の積み重つたとてもいひたい、群衆を押し分け押し分けて、彼女の前に出た。

地に跪き、祈りの心をもつて、サッフオの衣裳の裾に熱い熱い接吻をした。その絶体皈依のまごころを、送つたところのファオンであつた。尊敬禮拜の念が、いつしか愛慕の情に姿をかへることの當然さを、まづ考へておきたい。

そのいかにもいぢらしい、青年の心持の畏に陥ちたサッフオは、美少年ファオンの乞ひを容れて、レスボスに同行する意を決したのである。

万歳！

万歳！

レスボスの女王様万歳！

口口から絞り出される喚聲は、馬車を壓してごよめいた。かくて、その叫びは、いつ止むとも思はれぬほどであつた。

『お目出度う。』

『お目出度うございます。』

互に述べる、感激からくる簡単な挨拶の後には、彼女は、島人からかういひかけられた。

『おお、サッフオ様！あなた様を、私達のサッフオ様にする事は、どんな仕合に越した事かわかりませむ。』

嬉しさにこみ上げて、話しかけられた言葉に對して、返へ

すべきふさはしい答は、調子よく彼女の舌に上つてこなかつた。オリイヴの冠に手をあてて、彼女は、感謝するのがいちばんいいことであつた。

『この冠は、矢張あなたがたがあつてこそ、ほんとに貴いのですよ。』

返へされたこの言葉に、人人は泣いて彼女の心に喰入つたのである。

留守居に女主人の噂ばかりで、夜を目を暮らしてゐたサッフオ家の一同は、かくのごときせつぱつまつた場面で、昂奮

の涙に、とりごめもなくその頬を濡して了つた。

やがて、サッフオは、島民に言葉を改めて、新に伴れてきた若者を一一紹介し終つてから、自分自身のことのやうに褒めちぎつた。

『もしかして、あなたがたに勇士の劔と、雄辯と、詩人の舌が急に必要な場合がありますたら、その時こそ私のファオンを御使ひ下さい。決して、御遠慮なんぞは、御無用なことですよ。』

『若い日に薔薇を摘む。』アダムとイヴの姿――

詩歌も音楽も、一切の価値と意義を失つた、今のサッフオの心の歩みには、まつしぐらに、ファオンの新しい愛の翼に抱かれ、抱くより外はなかつた。『君を見れば、物いふ力は、私を棄てて、舌は亂れ、忽ち一道の美妙な情火が、私の肉身を流れる。私の眼は、何物も見へず、耳は鳴り、汗は身を流れおののき、私は草よりも色青ざめて、死ぬやうな心地を覺えた。』彼女としては、自身の稀な持ち物のすべてを無みして、いさぎよく全自我全人格を、愛人の前に投げ出さずにはゐられなかつた。目指すところの福樂、血みごろになつて味識する交歡は、『めいめいが、花輪を額に束ね、藝術を浸す陶酔の酒盃から、生命を啜り合ふ。』のであつた。

召使達一同を集めたサッフォが、ファオンを今日から男主人にするといふ、改まつた披露をしたのは、それから間もないことであつた。多くの下僕下婢は、ここに、一人の新しい主人を戴くこととなつたのである。

匂ひこぼれるやうな愛くるしさ、つい涙を誘ひ出すやうな内氣なメリッタは、眞向からじつと、ファオンの顔を見ることができなかつた。なんとはなしに、そわそわしてゐた。若い花婿を心の中にひしと掻き抱いたサッフォは、メリッタの香ばしい唇に接吻して、息もつがずに、あの美丈夫のファオン様を、どう見るかと訊ねた位に、胸を衝いて起る動搖を、

抑へることができなかつた。この質問に應すべき答は、至極簡単なものであつた。『ほんとに、御美しいこと。』——けれども、それ以上に出ることは、『年頃の娘は、知らぬ殿方の前では、伏眼をしてゐる。』のが日頃から女主人の教ではあつたとしても、初対面以來メリッタの乙女心は、なせか自制的に、この若者の顔を凝視しなかつた。一眼見ただけでメリッタは、そのままある距離をおいて、ファオンを傍観するに、苦しくてたまらなくなつたのだ。が、それほどは、サッフォが知らうわけはなかつた。このつつましやかな、ういういしく見へる美少女を、奴隷でなく、召使でなく、飽くまでも可愛い我が娘として、しかも、末長くサッフォ自身のファオンに

仕へることを契せた。それかといつて、觸れなばくづるま  
でに爛熟した、果物のやうな二人を對立して見ると、一抹の  
淡い不安と危険な影を直感することを、どうともなし得なか  
つた。今となつてサッフオは、過ぎ去つた、二つとない貴い  
若さを取戻すことの、最早でき得ないのを悔ひ嘆いた。

それは、花婿たるべき思ひがけないまらうごを迎へた、饗  
宴の夜のことであつた。酌をするべく選ばれた、メリッタの  
胸は、怪しくも掻き亂されて、たどへるものもなかつた。フ  
ァオンの差延べた盃に、『眞球なす泡』をつがうと、酒甕を支  
へた、メリッタのむつちりした、白い手首は、露を含んだ小

さい花のやうに、わなわなど、細く顫へおののいて止まなか  
つた。盃に盛る筈の高價な『サモスの美酒』の波は、ところ  
ろとして、床の上へ滴りこぼれたのであつた。それと悟つた  
一同は、早くも意味ある眼に、互に顔と顔とを見合せた。

興醒めた、といふほどではないとしても、この不思議な閃  
きに掠められて、婚醜に等しい夜の歡會の幕は閉ぢられた。  
それは、翌日の朝のことであつた。

新しく迎へた主人への贈物にとて、メリッタが編み初めた  
薔薇の花環に怪しく高鳴る血のゆらぎ、白く光る露を宿す睫  
毛……春の眼覺めに臨む女の心の脚色は、最早や、どうする  
こともできないまでに、進展して行つた。

メリッタは、何一つとして、不満とか不足とかを數へ立てることのない、現在の境遇でありながらも、その胸のぐん底に、巢喰つてゐる郷愁から、忘れられるすべを見出さなかつた。過ぎ去つて了つた、幾春秋をふりかへつてみると、思ひ出のすべては、涙の谷に埋まつたメリッタであつた。ごく幼い時、見知らぬ遠い他郷に、女奴隸として賣られた身である。たとへ、主人のサッフオが、十重二十重の身の縛めを解いて、何不自由もない、今日にしてくれたとは云へ、ごうして、心の縛めが解けてゐやう。『あの山越えて、あの海越えて——』『ふるさとへ！』といふあこがれは、矢も盾もたまらないのが事實である。もう一度、幾山河のかなたの土を踏むでなけ

れば、いつそのこと、『神の御國へ召される』を擇びたい氣もしないではなかつた。然るに、ファオンも矢張り、メリッタとおなじノスタルヂヤに悶える若人であつた。早くから別れた、両親への追慕の情念は、何よりも重い傷痕であつた。

『私は、ある夜の出來事を、幼な心にもはつきりと、覚えております。恐ろしいとも、なんともいはれぬ、戦ひの中の叫喚を耳にして、火の手が、天を焦して上りました。すると間もなく、私は、囚れの身となつて、敵の船につれ行かれたので御座います。暗い海を、船は、まつしぐらに走りまして、——私のやうな、ほか

の人達の泣きわめく聲に身をふるはせながら、たうとう、私は、レスボスの島につきました。さて、これから私は、どうなるものかと、心配してゐますと、サッフォ様が、私を可愛い子だといふので、澤山なお金を拂つて下さつて、その日から、私は、あの方の物になりました。情深いサッフォ様に買はれた私は、ほんとうに幸福でありました。カルタやダンスや家事に心をとられて、悲しかつたことだの、家のことも忘れ勝ちな日が、つづくやうになりました。』

と、メリッタは、『おや、お前さんは泣いてゐるね。』といひな

がら、ファオンが近づいてきて、身の上話を求めた時に、詳しい顛末を語つたのである。『それに、あなたがこの家にお出になつてからは……』と語尾を濁らして、現在の感じをいひ足した。ファオンは、少女の過ぎし日の哀話に心を魅せられて、かういつた。

『あの人は、實際物のわかつた方だから、お前さんにお金がなくても、自由な身にさせて、家へ飯へさせてくれるだらう。ひとつ、私から話してみやう。』

かう、いはれてみると、尙更故郷で生別した、その時分の



彼女を、ごうしたら愛しきれるかといふやうに勞つてくれた、銀髪に老ひた人人の俤を幻影にして、メリッタは、懷郷の念に堪えられなくなつた。

ファオンは、心を決した。

『おなじ悩みを負つてゐる二人が、結びつくに、なんの憚るところがあらう。』

かう自信をもつていひきると同時に、その手は、メリッタの手の上に重ねられ、押しつぶすかのやうに、堅く堅く握つた。そして、わなわなとふるへてゐる、白い小鳩さながらな、き

やしやな肉体が、力強く抱擁されると見る間に、熱い熱いキスが、少女の息をつまらせたのであつた。

新らしい、戀のプロオグ！

禁制の木の實の美味を知つた二人を、その秘事を、サッフオが、知らずにもやう筈がない。それが、多くの女中達の中でいちばん可愛い『いつも、わが娘として愛してきた者』であつてみれば、殊更らに、この花盗人を黙つて見てゐられないのは道理である。『戀は私は苦しめる、あまく、またにがく、うち克ちがたき怪物よ。』と苦しみもがいたサッフオは、裏切り者への嚇怒、それから生ずる絶望とで舵を失つた、船の進みといつた、安定のない空虚を感じてきた。ごう方向をきめ

ていいかさへも、判断がつかぬまでに、余りに大きな破綻として困惑した。握手、抱擁、接吻——が、とりごめもなく、その両の眼を遮る。

『あのスウキイトな柔い名』のメリッタは、最早十六才の妙齡を迎へた。十三年の昔、サッフオの懐に入つてきて温められた、真紅の血潮に傷いた、病める小鳩であつたことを、忘れやうとしても忘れられない。眼に立つて、急にそわそわする今日此頃、まるで、『花嫁のやう』に着飾つたり、『愛の證あかしに贈る花環』を、薔薇で編んだりするのが、ちくちくと、サッフオの心を刺す針となるのであつた。『戀は、わがたましひを焼く、樅の木を打ちつける、山の風のやうに。』動搖してゐ

る、サッフオである以上、突然の闖入者に對して、嫉妬と憎悪から、亂心に類する感情を煽ることは、あたりまへである。ギリシヤ全土の帝王者をも拜跪せしめ、榮えあるオリムピヤの冠を戴いて、羨望の的となり、ミュウズを頌讚するアガニッペの泉の音、星のささやき、ミュウズの合唱を耳にするバルナスを下つた、彼女の榮光と自負とを、いたましくも蹂躪されて了つた。

果てしも知らぬ、哀傷のどん底に沈み行く詩の女神は、リラを掻き抱いて弾き始めた。今し、サッフオの腸をちぎつて、絞り出される歌のメロディイは、祈禱そのものといはなくてはならなかつた。

黄金の玉座の  
アフロディテの女神  
悪戯にかしこき  
ツォイスの姫神  
恐れと愛の  
重荷をのぞきたまへ  
このとどろく胸に  
さはれ來ませ  
君の耳に幾千度  
かつて愛でし

わが琴の絃の  
いみじきしらべ  
とどろかん時  
父なる神の  
宮を出でて  
きらめきわたる  
車をはるは  
仕ふる二羽の  
たのしき雀  
黒き翅を  
かろく振りて

運び行く道は  
天より地へと  
かくて来たまふ  
氣高き女神  
不死の額に  
笑をたたへ  
君は問ふ  
何の悩みを  
訴へて  
願ふさけびの  
響は何ぞ

熱するところ  
何を求め  
とごろく胸  
誰を慕ひ  
愛の力もて  
捕へんとはする  
サッフオ誰ぞ  
汝が胸を射しは  
彼いま汝を  
避くるとも  
やがて汝の

手になづき  
彼汝が贈物を  
受けずとも  
やがてみづから  
なびくべく  
彼なほ汝を  
愛でざるも  
やがてその日は  
近づかむ  
ことみな汝の  
意にそひて

また來り救へ  
この胸を  
せばめて攻むる  
この惱み  
わが求むる願に  
幸を垂れ  
戀路の闇の  
星となれ

心が飽滿の度を越すまで、サッフオは、歌ひに歌つた。それでも、愛を盗んだ、曲者への惜みの念は、あさましくも、

打消さうとして、打消されなかつた。遂に、閃閃と光り輝く七首は、しつかりとその手に握られたのである。

理情の迷路に佇んで、深き考へに沈んだメリッタは、心から恩義の叛徒には、なりきつてゐなかつた。踏み行くべき、正しき大道を知りぬいてゐた。『神様でも奪ふことのできない』戀人からの贈物を投げ出し、いさぎよく、女主人の白刃の下に座る覺悟をきめた。忘恩者が、かうした純情を現はしてみると、刃を握つたサッフオの腕は、おのづと力なくも下にさがらざるを得なくなつた。このせつばつまつた意志を、もう一度元へ戻して、考へ直した。そして、取るべき何かいい策は、ないものかと考へられるだけ考へ、尙、祈れるだけ祈つ

て、教を神に乞つてみた。流石に、殺害することの残忍さを、しみじみと恥ぢた。――

やつと、胸に浮んできた最後の手段は、キオスの島へ少女を放ち流すことであつた。

ラムネス老人は、夜更けの小床から、見果てぬ夢を見てゐる、メリッタを呼び醒まし、真闇の岸に繋いである小舟に乗せて、人知れずキオスにゐる、サッフオの知人の家に托す計畫を、主人から命せられた。きつとした決心を示して、その意にうなづいた老人は、命せられたままの方法を、うまく運ばせやうとする刹那に、ファオンによりて、事の頗る急なの

を、観破されて了つた。企ての一切をファオンの前に、ラムネスは、白状せねばならなかつた。

『俺が、この間一髪の危険を知つたのは、神様のお告げだ。一身を賭けても、俺は、「俺のメリッタ」を救はなくてはおかないぞ。』

威猛つたファオンは、ラムネスを睨めつけた。そして、サッフォを呪つた。『メリッタを追ひ拂ふなら、俺も、いつしよにここを去らう。二人であの舟で行かう。』と迄堅く心を決した。サッフォの命令一下で、たとへ全島の壯者が武器をとり、

ごんなに及向つてきやうとも断じて、戀人を手離しはしない、と心の中に叫んだのである。敵の多い地を離れて、ただ二人きりで味はれる、歡樂の勝利、その蜜の流れる樂土を想像して、心はあせりにあせつた。

ひたすら、その好機を捉へるのを、ファオンは待つてゐた。

一夜——それは、星も南の空に大きくきらめき、天鷲絨のやうな海面を、掠めて吹く微風は、低いオクタアヅを奏してゐる。海の女神アムフィトリテも、戀人同志の行方へを護るかのやうな氣がする。

ファオンとメリッタは、機を失することなしに身軽く、豫

て用意しておいた、船に飛び移つた。船首が、波を乗り切ると、二人は、ほつと息をつき、顔と顔とを見合せて、につこりと笑ひを交した。けれども、その眼は、航海者の守護神と見做される、双子座を仰いで、心の中に夜の海の安全を念じながら、両の腕は力限りに櫓を漕いだ。

『二人の曲者が、駈落した！』

サッフオの忠勤な老人は、息せききつて来て、急な凶報を、主人公に齎らした。

『まさかに、それは、ほんとはあるまい。』

と、サッフオの口から洩れ出たのを見ても、彼女の驚きと嘆きとの、どれだけ大きいものであつたかが察せられる。初め

は、老ひたる人が、いい加減なことをいふとしか信じなかつた。然し、落ちついてよく聴けば聴くほど、今はとばかりの意外さに、『復讐の神様の耳は聾む、手は不具となつてゐる。』とばかりに激怒した。

この不吉な知らせから、サッフオの家の人人は、一齊に床を蹴つて、一刻を争ふ身仕度に忙しかつた。またたく間に、口から口へ、耳から耳へと擴まり行く警報に、忠實なレスボスの島人は、『私達のサッフオ様』のために、深更の海濱に群がり参じた。

『サッフオ様の仇をとらう。』

雑音ながら、異口同音にわめく聲が、はつきり受取れた。



『追手の船を出せ！』

『船足の早いやつを、支度しろ！』

『一刻も猶豫しては、だめだぞ！』

満を張つた弓絃から、放たれた箭のやうに、幾艘かの追手の船は、ヘルクレス、テセウス、オルフェウス、ネストルなごいふ、五十人の勇士を乗せた『アルゴノオット』のやうに、波上を這つて行つた。『すべての黄金を投げ出しても』と臍を固めた、サッフオの表情を見守つて、ミロン、テルバンデル、リヒヤス、フェレス、クセナルホス等の親しい友人は、ごんな犠牲を拂つても、恩と愛とに對する二人の叛逆者を、捕へなくてはおかないと誓つたのである。

遙の沖合に浮んだ、一艘の小船を、武装した澤山な船で包圍した。頑強に抵抗する、ファオンを目蒐けて、投げ付けた追手方の撓の一撃は、狙が誤つて、メリッタの額を割つた。淋漓たる鮮血に塗みれ、少女は、氣息奄奄として昏倒した。戀人の介抱に、心と力の全部を移さざるを得なかつたファオンは、その隙に乗じて、苦もなく捕へられたのである。

蜜の流れる、愛慾の地にあこがれて、刺のある薔薇の花園を見棄てた若い男女が、サッフオの家に引戻されたのは、太陽が、大きく眩ぶしく海上に輝きわたつて、眼路はるかな波間の船が、一艘一艘眸に映つる、『薔薇色の指ある』黎明であ

つた。

『俺は、たしかに女奴隷を盗み出した。その身の代金なら、俺は、クレルスの寶物ほごでも積んでやる。だが、俺達の愛に立入つてまで、サッフォに裁さばきの権利はない筈だ。なるほご、メリッタの肉体は、買はれたものだらうが、心まで買ふことは許されまい。斷じて俺は、この娘を、サッフォの手には渡さないぞ。』

フフォンは、きつとした態度で、サッフォを眼尻にかけてさう叫んだ。それから、語氣を荒立てて、かういひきつた。

『その歌のやうに柔かな心、純潔な情、唇からもれるゆかしいメロディに、俺は、幼少の時からあこがれきつてゐた。それがどうだ、今となつては、まるでメデュサのやうな、魔性の女にしか見へなくなつてきた。この俺の眼には——』

サッフォは、そのいふがままを、靜に聽いてゐた。あだかも、兩眼を盲いたかのやうに閉して、聽く人はやさしかつた。耳に這入つてくるすべてが、仮の世の悲しい約束であり、掟であるのを、はつきり見窮めたかのやうな、謙虛と従順な態

度に出た。サッフォは、昂奮し激怒してゐる、敵の云爲に對して、何一つ咎めだてをしやうとはしなかつた。そのいふがままに、そのなすがままに委せて、彼女自身は、絶体無抵抗に、捨身的無我の、全く新しい魂をもつて更生した。

かういふ、美しい心の姿を示したサッフォに、凶暴なファオンは、さながら、神からインスピレーションを與へられた、とでもいふやうに、ある絶大な聲に戦慄した。

心眼は、爛爛として見開いた。

そこで、硬ばつた舌ながら、懺悔聽聞僧の前に跪座して、赦罪を泣訴する羔のごとくに

『賤しい私は、真心からあなたを愛して居りました。

それは全く、人間が、神様を尊び愛するやうに愛したのです。だが、私ごとき賤しいものが、尊いあなたに觸れましたことは、正しく瀆神の行ひであつたと思ひます。心からそれを、私は、恥ぢ入るので御座います。どうぞ、御許しを……』

ファオンは、かくいひ直さずには、ごうしてもゐられなくなつてきたのである。メリッタといふ、新しく現はれた像すがたのために掻き曇つた、ファオンの眼には、サッフォは、一時悪魔の化相に變つたのであつた。然し、やがて、眼の曇りが澄

んで、元に戻へつてみれば、ほんとのサッフォを直視せずには、ゐられないのだ。その凜乎たる威容を仰いで、ファオンの頭は、おのづから下らざるを得なかつた。彼自身の対象者にして考へるには、ほんとに大き過ぎ、尊過ぎることを今更のごとくに悟つた。

愛の誓にそむき、ひそかにも、他の愛を隠しむさぼつた、ファオン自身の罪を、そしてまた、主の恩を賣り、主の戀人の愛を盗んだメリッタの罪の裁きを、サッフォの前にひれ伏し希つて止まなかつた。赤子が、慈母の膝にすがつて、哀を乞ふ有様——全く、その姿であつた。

サッフォは、二人の罪を審判しやうなごとは、思ひもよらぬことであつた。現世の煩はしい縛しめを冷笑する萌しが、心に植え付けられてきた。小さい私情のそねみやひがみから解脱して、ヨリ博大な、ヨリ寛容な神の思召に一致しやうとする、新たな希望に満ちてゐた。そして、最後に落付くべき、大きな安息所を選んだのである。

『死!』これ以上に出た大きな勝利は、結局我が住む現實界にないど、サッフォは思つた。改悛の情に身を藻掻いてゐる、若い二人の男女などは、大きな問題ではないし、余り焦慮の中には、措かなくなつてきた。

我が家の内の、並び立つた二本の柱に身を寄せたサッフオは、真下の岩壁に打ち寄せ、打ち碎ける、白金のやうな海の水沫を凝視して、大理石の立像かのやうに、蒼白い顔を伏せてゐた。やをら身体を動かすと見る間に、いつも二なく好んでゐる薔薇の花束を、黄金を、寶石を……その他装身具を悉く、海の渦巻きの中に投げ込み、落ち行く先を見守つた。傍にかけられてある、奇しき樂器の

さらば

わが神聖なる

豎琴よ來れ

言葉を

汝のものごせよ

と、彼女が作り歌つた豎琴は、エオリアン・ハアブのやうに、微風に觸れてもろもろの絃が、妙なる余韻の中に、おのづと鳴つてゐる。すべての冷たい表情が、陰慘として、くつきり浮き出された。

サッフオは、黄金のリラを手にとつた。祭壇に供へておいた、オリムピヤのロオレルの冠を、静に頭に戴いた。真紅のガウンを、身に纏つた。かく、身仕度を爲し終ると、彼身は、膝を祭壇の前に屈して、ミュウズへの祈願に耽つた。今まで

のはしたない戀愛の三角關係の葛藤を謝し、あまつさへ、若き両性の上に、いとも尊い祝福のあらむことを、くれぐれも念じた。

祭壇に点せられた聖火は、煌煌として、あたりを白盡するほど輝き渡つた。

『弱いサッフォを、あなたがたに見せたのを、どうぞ、許して下さい。』

サッフォは、おごそかにいひ終つてから、涙に汚れたファオンの額に接吻して

『遠い世の友人が、あなたを接吻してゐますよ。』

といひ、次に泣き咽んでゐる、メリッタを抱き起し、燃えるキスを與へて、親しい語調でいつた。

『これは、死んだあなたのお母さんの接吻です。』

最後の言葉が、終るや否や、サッフォは、アフロディテの神に感謝の歌を捧げた。

尊き奇しき  
天つ神神よ  
なれらの厚き  
恵もて  
よそほひたまひし  
我をしも  
手には歌琴  
詩の籠  
心に感ずる  
もろもろを  
歌ひあらはす

力こそ  
なれらの賜物と  
謝しまつる  
かよわき頭に  
勝利の冠  
飾りたまへる  
我身こそ  
永劫の世にまで  
香にほふ  
ほまれの名こそ

残るらめ  
黄金にまさる  
我が歌は  
この世のはてに  
絶えざらむ  
なれのみめぐみ  
謝しまつる  
花もてめぐる  
うつしよの  
飲みほさであれ

さかづきは  
おお見そなはせ  
我はしも  
なれらが御招きに  
つつしみて  
花輪めぐれる  
歡樂の  
手にもつ盃  
すてたるを  
おお神よ



なれは我が  
花も散らせよ  
この幹も  
うち枯らせかし  
どこしへに  
われは始めの  
それのごと  
いまはのきはも  
安らかに  
神のみまへに

つれよかし  
この世のもだえ  
苦しみに  
え耐へぬよわき  
わが身かな  
いまはの望みを  
神神よ  
きかせ給へよ  
見そなはせ  
犠牲ひの火ほ影かげに

あかつきの  
ほのほの色に  
茜さす  
天つ神神に  
謝しまつる  
おん身ファオンよ  
メリッタよ  
ともどもきたれ  
後の世に  
、、、、、、

最も壯重に歌ひ終つた、サッフオの身は、いかにも沈痛に見へた。それは、くつきりと圓光が、房房と波立つた、髪の上に描き出された眩しさを、ごうして、ファオンとメリッタが見逃がすことができやう。ミュウズさながらの靈氣に、彼等の眼は、しばらく恍惚として、エクスタシーの中にあつた。サッフオの足が、一二歩輕ろやかな歩みをするかと思ふ間に、その両の手に

わがよろこばせんと  
つとめしもの等  
もつともわれを

傷つけぬ

と悲しみ訴へずにはゐられなかつた、ファオンとメリッタの手首を取つて、固く固く、この一對の男女の互の掌を握り合せた。この歡喜にさへ、超人サッフォの威壓力は、二人の口から出やうとする、何の言葉をも許さなかつたのである。

麗人サッフォの姿が、いつしかミティレネから、吹き消すやうに見られなくなつたのは、それから間もないことであつた。レスボス全島の人は、いづれも憑かれたやうに、『私達のサッフォ様』の噂を話題の中心とし、疑惑は疑惑を生んで、

果しがなかつた。『神隠しになつた！』といふのが、島民の重大問題視する、最後の答案とするより外はなかつた。

ミティレネの邸宅をぬけ出た、サッフォは、シシリイ島に渡つた。それから直に、その足は、リュウカスの島を踏んだのである。この島の台地の盡きるころの海角に、リュウカディアと名付けられる、突兀たる絶壁がある。その突端には、アポロの神の祭典に用ひる、ステエチが設けられてある。ステエチは、祭禮の都度歌舞を捧げるものであるが、時には、この數千丈の懸崖から、重罪犯の死刑囚を刑の執行として、海中に投げ込むにも用ひられた。急轉直下、その余りに猛烈な急速力を幾分か殺ぐために、囚人の身体に幾羽かの鳥類を

結び付けたのでも、恐らくは、その難地の程度を髣髴すること  
ができやう。それで、万一にも海中に投せられた、罪囚に  
して、ほんの僅な息でも通つてゐる場合には、これを奇蹟的  
神秘的に見做して、特に死一等を減するといふ、習慣になつ  
てゐた。『リュウカディアの巖から飛ぶ』といふ言葉には、絶  
望とか、決死とかといふ、せつば詰つた意味が、含まれてゐ  
たのである。

空想の翼を張るだけでさへ膚粟を感ずる、リュウカディア  
の白い巖上に、サッフオは、身を真直に起した。分秒の躊躇  
もなく、その五体が宙に躍ると見る間に、幾千丈もの下の渦  
なす海中に身体を葬つて了つた。『死は悲しかるべし、神神も

そを知り給ふ。』と歌つた作家その人は、このやう道を選んで、  
死を急いだ。

もしかして、美しくも清らかに、そして、尊かるべきこの  
『レスボスの鶯』の眠つてゐるやうな、遺骸を見ることがで  
きたならば、少くとも、ラファエル前派の畫家ミレエスの力  
作、『オフィリアの死』のやうな死態しにざまであつたらうことに、疑  
ふ余地はない。

天才の踏んできた荆棘の道、その一生のキャタストロオフ  
は、實に、面を掩ふほどの悲劇そのものといふより外はない。  
所詮、愛は、彼女にとつてアルファであり、オメガであつた。